

SANNO SPORTS MANAGEMENT

SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY, JAPAN

Vol.

13

コロナ禍におけるスポーツ Sports in the Corona disaster





SANNO UNIVERSITY

マネジメント理論と実践を柱に ビジネスプロフェッショナルを育成

産業能率大学は、世の中で実際に役に立つ能力を育成する実学教育を根幹としています。
社会人・職業人としての基本的な能力やビジネスの実務知識とスキルを身につけ、
また、主体性を持つ自立したビジネスパーソンとしての教養を養うため、
「真剣に取り組む力」「実行する力」「深く学ぶ力」に焦点を絞ったカリキュラムを設計しています。
また、コンサルティング機関である総合研究所と連携し、
ビジネスの最新情報や最先端の動向を教育に取り入れるべく企業や団体との提携に取り組むなど、
産業界に最も近い大学として学外とのコラボレーションを積極的に進めています。



CONTENTS

コロナ禍におけるスポーツ

- 04 研究員紹介
- 05-07 01 女子ビーチバレー部 全日本大学選手権に優勝して
～活動自粛期間中に考えたこと～
- 08-09 02 産業能率大学サッカー部 小湊隆延監督インタビュー
2020 年度シーズンを振り返る
- 10-11 03 逆境でこそアグレッシブに
―本学を卒業したコーチ・職員が語る湘南ベルマーレ―
- 12-13 04 コロナ禍におけるプロ野球観戦イベントの
マネジメント
- 14-15 05 コロナ禍における、小学生ビーチバレーボール大会
「SANNO CUP」の開催

RESEARCH REPORTS

- 16-17 06 オンライントークイベント
「OB・OG が語るスポーツビジネスの魅力とこれから」を開催
- 18-19 07 コロナ自粛下で考えるプロ・スポーツの経営
- 20-21 08 「大学運動部サポートプログラム：
第 4 期リーダーシップ養成プログラムの実施」
- 22-23 09 コロナと世論と東京五輪
- 24-25 10 プロ野球ファン心理研究
―心理検査を用いた教育実践―
- 26-27 11 ウィズ・コロナ時代のインバウンドスキーヤー獲得に向けて
～新潟県湯沢町での研修実績を踏まえた考察～
- 28 12 SANNO SPORTS TOPICS 2020
- 29-30 13 SANNO スポーツマネジメントのあゆみ (2004-2020)

研究員紹介

Staff

■ 研究所長



中川 直樹

産業能率大学
情報マネジメント学部 教授

■ 研究員



木村 剛

産業能率大学
経営学部 教授

■ 研究員



齊藤 弘通

産業能率大学
経営学部 教授

■ 研究員



小野田 哲弥

産業能率大学
情報マネジメント学部 教授

■ 研究員



椎野 睦

産業能率大学
情報マネジメント学部 准教授

■ 研究員



高瀬 裕也

産業能率大学
総務部秘書課

■ 研究員



駒澤 恵一

産業能率大学
大学事務部 教務課

■ 客員研究員



行方 剛

行方剛スキークリニック
産業能率大学 客員教授

■ 客員研究員



川合 俊一

日本ビーチバレーボール連盟
会長
（前）ケイ・ブロス代表

■ 客員研究員



川合 庶

産業能率大学
女子ビーチバレー部 ヘッドコーチ
産業能率大学
情報マネジメント学部 兼任講師

■ 客員研究員



西野 努

浦和レッドダイヤモンズ
テクニカルディレクター
産業能率大学
情報マネジメント学部 兼任講師

■ 客員研究員



水谷 尚人

株式会社 湘南ベルマーレ
代表取締役社長
産業能率大学 客員教授

■ 客員研究員



中島 靖弘

NPO 法人湘南ベルマーレスポー
ツクラブ トライアスロンチーム
ヘッドコーチ

※研究員肩書きは
2021年4月1日現在のものです

01

女子ビーチバレー部 全日本大学選手権に優勝して ～活動自粛期間中に考えたこと～

インタビュー・文：中川 直樹

2020年度全日本大学選手権にて3年ぶりに王者を奪還した、山田紗也香（情報マネジメント学部、3年）／オト恵美里（同、2年）ペアに、コロナ禍で十分に練習ができない状況乗り越え優勝を果たした要因と今後に取り組むべき課題について伺いました。

—今日はインタビューをよろしくお願いします。

まず、大学選手権優勝おめでとうございます！大会を振り返ってみての感想をお願いします。

オト：そうですね。試合をすごく楽しめたと思っていて…何で楽しめたかって聞かれたらちょっとよくわかんないですけども今までやってきた試合の中で選手権が一番楽しかったです。チャレンジャー精神で。選手権出るのが初めてだったので。楽しんでやってやろうみたいな。それでその勢いのまま試合をやって結果的に優勝できたとは私は思っています。

山田：自分は逆に開き直っていました。今回ライバルと言われるチームは全員先輩で、これが最後の選手権だから、優勝しようと思ってきてましたけど。まだ一応自分には来年もあるし、だったらもうここは勝っても負けてもいいからとりあえずやろうって。逆に1, 2年生で出場した時は、その勝たなきゃっていうのが強くて、自分とペアを組んでる人は4年生で、ここで負けたら私のせいだったので。それが今回はなかった感じです。

—春に緊急事態宣言が出て思うような練習ができなかった時どんなことをやっていました？

オト：まず体力を落としてはいけないと思って、自宅のできるトレーニングだったり、外走ったりとか。あとはダイエットしようと思って夏までに…食事とか…結構気をつけて摂っていました。

—女子ビーチ選手は体重コントロールが重要になってくるのですか？

オト：そうですね。太っちゃったらもう飛べないし動けない。それはダメなんで。特に。そこは一番気にしました。

—自分のベスト体重を維持するために具体的にどんなことをしたのですか？

オト：えっ。ブロッコリー。ブロッコリーめっちゃ食べました！

—どうしてブロッコリーだったのですか？

オト：インスタとかで、自粛期間中にお家簡単ダイエットのような情報が色々と出回ってたんですよ。そこでブロッコリーが良いという情報を見つけて、私も好きなので。茹でるだけだし、あっ食べようってなりました。



ビーチバレー部 インカレ優勝 王者奪還

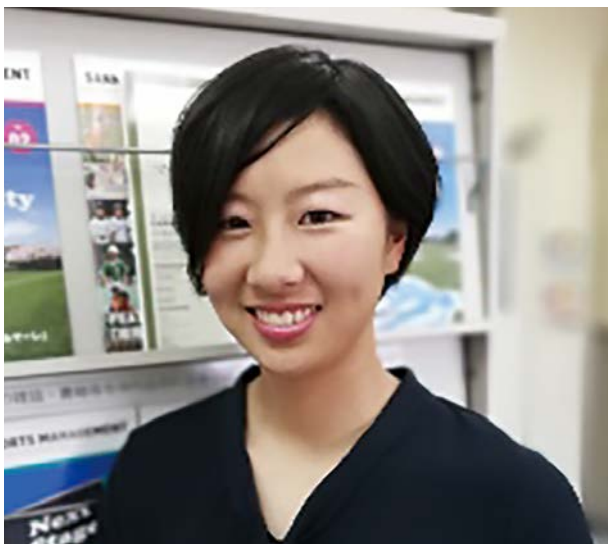


オト恵美里さん

——続いて山田さんどうでしょう？

山田：自分はコーチと話して走り方改革をするのと、あとターンの回るスピードを上げようということを行っていました。コーチからは、とりあえずこの2つをやっておけば大丈夫だろうって言われていたんで、その練習をひたすら繰り返しました。また、コーチが色々なメニュー組んで下さり自分でやったりそのコーチとオンラインで行ったりしていました。

ただ、コートも公共の施設は閉鎖されていたので、砂に実際に触れて動くということはできていなかったんで、練習が始まる時にやはり普通の地面でやっただけではダメだというのは感じました。あと、逆に自分は体重を落とすと持久力が落ちてパフォーマンスが落ちるタイプなので逆にそのタイミングでちょっと体重増やしといて。その練習が始まってから絞ってこうっていう感じでした。



山田紗也香さん

——コロナ禍で十分な活動ができずに不安に思ったことは何かありましたか？

オト：2年生になって、これから頑張ろうっていう時に練習が出来なくなって、ボールに触れたり砂を踏んだりする時間がなくなって、次にボールに触るのはいつか分からなかったんで、パフォーマンスが落ちないかなとか、ま、落ちるんじゃないかなという不安はすごいありました。

——オトさんはその不安に対してどう立ち向かったのですか？

オト：その、自分がやったことなんですけど、体重落として、体重が軽ければ次にボール触る時に、動けるかなっていうように考えていました。その、練習できない期間があったとしても、コロナでボールに触れない期間があったとしてもって感じですかね。

——なるほど。ダイエットがここにつながる訳なのですね。実際に自分が砂の上に立った時にまず動けるって言うことは自分の中では最低条件であって、とにかくそこは失わないようにしようとしたのですね。そうすることによって結構気持ちが落ち着いたのですか？

オト：はい結構。あっ、体重落ちた！みたいな感じで。筋肉が落ちたのもあるかもしれないので、ちょっと何とも言えないんですけど。でも、気持ち的にはこれでまた練習始まってそこで絞って行けたらさらにパフォーマンスが上がるかなっていう、その準備段階っていうかスタートラインには立てたかなっていう持ちにはなりましたね。はい。

——ちょっと大袈裟かもしれないけれど体重が心の支えみたいな部分もあったということ？

オト：はい。そういう何か一つはやらないとなって思っていました。

——1日に何回くらい体重計に乗ったのですか？

オト：1日に？2回ですか。

——山田さんにも同じ質問で、不安にどう立ち向かったかを教えてください。

山田：自分も何か一つはやっとかなきゃなっていう風に思っていました。

ただビーチバレーに関する事で言うと、今、頑張ったとしても、体力的にだったりとか、技術面だったりとかで落ちてしまうのは仕方がないことで、逆に今まで何年もかけてやったものだからそのたった3ヶ月で全部が落ちるわけではないという風に考えていました。何年もの間かけて培った体力面・技術面は何年もの間かけて落ちていくものだと自分は考えているので。そのたった3ヶ月の間だから、その間をゼロにするんじゃなくて0.1でも動いているのであれば、継続していることになるという考え方をしていました。なるべくゼロにはしないっていう考え方です。

——では、逆にコロナがプラスに働いたっていうことはどんなことがあったのですか？

オト：時間が今まで以上にできて、自分の性格について見つめ直そうと考えて、ノートに良い所や悪い所とかを書きました。全部分かる訳ではないですけど。自分が思う自分の性格を書き出して、ああこういう所ってたぶんプレイに出るなとか、自分はここ変わらなきゃいけないんだな、でもここをもっと伸ばした方がいいなというように自己分析をしていました。

そして本を読むようにして、考え方を幅広くしたいなと思って。自分自身のことを今まで深く考えたことがなかったから、ま、自分の性格とか知って、これからの自分の人生とかビーチバレーにプラスになるように書いていけたらいいなと思って取り組みました。

——自分が自分を見つめることによって、活動がその再開した今に、変化って何かありました？

オト：そうですね…なんか、目に見える変化とかはないかもしれないですけど。

自分の中で、人から言われたことの捉え方って言うか。今までは、素直にハイしか言えなくて。頭の中でも自分でその言われたことを深く考えなかったんです。あ、じゃその通りにやればいいんだって。でも今は自分でその言われ

たことをさらに分析というか、さらに分解して、ああこういうやり方もあるんだとか、何と言うか、考え方の幅が広がったっていうか、自分の中でですけど、そう感じています。今までは人の意見をそれが合っている、間違っているという風にしか解釈できなかったのですが、そういうやり方もあるのだなっていうように捉えられるようになったというのを感じています。

——優勝して次に期待されるのは連覇だと思うのですが、ご自身が考える課題について教えてください

オト：プレー面で言ったらもう本当に色々あります。収まりきらないって感じなんですけど、自分が一番できるようにならなきゃいけないって思っているのは、さやかさんにきちんと自分の伝えたいことと持っていることを短く簡潔にっていうか、すぐ、伝えられるようなコミュニケーションを取っていかないといけないって思っています。

——発信力を高めたいということ？

オト：そうですね。
さやかさんからはいつもの確に試合中にアドバイスして頂けるんですけど、自分はちょっと気になった事とかをばって言えないんです。さやかさんに。だから、その自分が思ったこと、考えたことを共有するために、きちんと伝えるところから始めないと、その次に進めないと思っています。

——得点が決まって次のプレーに入るまでに、長くても30秒とか…

山田：12秒です。12秒。決まっています。

——その中でのコミュニケーション。お互いが言ったことを理解して、じゃこうねって結論出さないといけないから、自分からの発信力を高めたいこと。そのために何か工夫とかありますか？

オト：工夫ですか？もう練習の時はやっぱり喋れる時間があるので練習の時から発信していくと言うか、癖をつけてっていうか当たり前にして試合でパッとできるように練習からしゃべるっていうか、が大事かなって思います。

——山田さんはこの点についてどう感じていますか？

山田：私はおせっかいが発動しちゃうんで、もう何でも言ってあげたくなっちゃう。だから全部言って。なので私はちょっと一回ためて話そうっていうのができないんです。ですから逆に自分はそこを一回身につけておかないといけないと思っています。

——おもしろいですね。では今度は山田さんの方から。

山田：ずっと1年生の頃からの課題ではあるんですけど、メンタルを鍛えなきゃいけないと思っています。それは、たぶん自分が納得するようになることはないと思うんですけど。

1年生の時に4年生の先輩から言われた、何があっても平常心で楽しむことだけ。自分達が楽しむしかない自分達の体調が悪いとかそういうのも相手の人にも観客にも審判をやっている人にも関係ないことだから、自分は一定のパフォーマンスを延々とやり続けなければいけないねっていうのは、本当に大切なことだと思っていました。

私が今目指すところは4年生の時に私が背中を見ていた先輩の立ち振舞いができるようにならないと自分が先輩としてやっていくのは不可能だなと思っているので、その真似をしていけたらなっていうのがまず一番ですね。

オト：さやかさんメンタル弱いもんね（笑）

——頼られる先輩でいたい？

山田：頼られるというよりは、自分に余裕を持ちたい。自分が逼迫した雰囲気になっちゃうと。あっ、この人今ちょっと駄目そうだからって感じになっちゃうと思うので。私今、全然平気ですけどみたいな余裕を持てるようになったら、また少し世界観も変わってくるんじゃないかなって思っています。

——この話を聞いてオトさんどうですか？

オト：いや、おっしゃる通りで、さやかさんって結構自分の世界に入るというか。私が勝手に思っているのはあるんですけど、あっ今、ちょっと何か考えているなというオーラが出る時が多いんで、さやかさんに喋りかけづらい時って結構ありますね。

——最後にこれまでの経験も踏まえながら今後の抱負を話してください。

オト：そうですね。一番近いっていうか大きい大会っていうのは選手権だと思うので、まずは連覇を目指して行くのと、今後自分ではできればビーチバレー続けていきたいという思いがあるので、学生生活あと2年ですが、勉強もやりながら部活動も今まで以上にいろんな経験をして、今後の自分のビーチバレー人生に活かしていきたいと思っています。

——では山田さん。

山田：まあ今後の抱負としては、一番自分がこの山田さやかという人生を生きていく中で、ビーチバレーを多くの人に知ってもらって、こういう楽しいスポーツがあるんだということを広めたいです。また、ビーチバレーボールを知っているけど、競技でそんなに真剣にやっているのを知らなかったという人たちに、スポーツとしての楽しさも知ってもらいたい。海外で行われているような、フランクに遊びでゲームを見られるような感覚っていうのを日本人にもちょっと知ってもらいたいなとも思っています。今後も何らかの形でビーチバレーにずっと関わっていけたらなという風に思っています。そのために自分が学生のうちにしかできないことを今のうちに見定めておくことは大切なかなって思います。

今日はインタビューありがとうございました。



産業能率大学サッカー部 小湊隆延監督インタビュー 2020 年度シーズンを振り返る

文責：齊藤 弘通

2020年度、関東大学サッカー戦2部リーグにおいて産業能率大学は、10勝6敗6引き分けという過去最高成績の4位（12チーム中）でシーズンを終了し、2021年度シーズンの2部リーグ残留が決定しました。このサッカー部躍進のポイントについて小湊隆延監督におうかがいいたしました。

齊藤：今回4位ということで、2020年度シーズンは素晴らしい成績でした。この成績に関して、監督はどのようにお考えでいらっしゃいますでしょうか？

監督：結果的には、想定していたよりも良かったと言えば良かったし、負けた試合とか引き分けた試合のことを考えると、欲を言えば昇格できる2位とか3位以内に入れる可能性もあったので、「もったいないなあ」と思うのと、でも「よくやったなあ」という思いと、両方の見方があるのかなと思います。

齊藤：場合によっては昇格の可能性もあったんですね。

監督：そうですね。途中まではその可能性もゼロではなかったのですが、逆にその緊張感だったりとか、より厳しい試合の経験の少なさというか、その差が昇格していった流通経済大学や拓殖大学との差だったり、3位の関東学院大学との差だったのかなという気がします。

齊藤：そういう厳しい試合、競り合うというか、最後の一手というところが弱いという感じなのでしょうか？

監督：そうですね。一人ひとりの責任感だったりとか、状況を読む力、この苦しい展開をどうひっくり返すのかとか、そういうことを、キャプテン一人が理解しているだけではなくて、ピッチに立っている11人が冷静に状況を判断できて、勝利に導くという「一人ひとりのリーダーシップ」が必要だったのではないかと感じます。

齊藤：監督がご就任されたときのインタビューで、監督は「産能スタイル」として、「自分たちで自分たちのサッカースタイルを考える」姿勢を重視するとおっしゃっていましたが、あれから3年経って、その実現度はどうなのでしょう？

監督：そうですね、就任当初、特に1年目は私自身も、「もっと教えるなきゃ」とか、「結果を何とか出さなきゃ」という気持ちが強かったんです。ただ、いわゆる大学スポーツのあり方というか、大学サッカーのあり方というところからいくと、彼らが主役で、彼ら自身が主体的に自分たちのサッカー部を作り上げていくという実感を彼らにどうやったら持たせてあげられるのか、ということをごここ1、2年はずっと考えてきました。「彼らがどういうサッカー部にしたいのか」、「どういう産能スタイルにしたいのか」というところに向き合うよう

にサポートしてきた結果、試合の流れを読むのも、ピッチに立っている学生が、「こういう流れの時にはこういう声を発して、チームとして同じ方向を向き合おう」ということを彼ら自身が感じて、すぐ行動に起こしている、それが2020年度のシーズンはかなりできるようになりましたね。

齊藤：2020年度はコロナ禍ということで練習にも制限があったり、目標を見失ってしまうような時もあったのではないかと思います。そういう部分は大丈夫だったのでしょうか？

監督：実際そういう気持ちになってしまう学生もいましたし、非常に難しいシーズンではあったなあと思います。対面授業をやっていた頃は、サッカー部だけの仲間ではなく、一般学生から学ぶことが多々あったり、違う視点からサッカーを見る機会がありましたが、2020年度はそういう機会が少なくて、いろいろな面から学生が成長する機会がなくなってしまったのかなあと思います。

齊藤：「こういう状況でも前を向いてやっつけよう」といったことを監督から意識的に働きかけたりしたのでしょうか？

監督：「限られた環境で、かつ好きなサッカーで、どれだけ努力を極限までできるかということを実践していこう」と。世の中に出て、好きな仕事で続けている人ってそんなに多いわけじゃないじゃないですか。好きじゃないけれどもお金を稼ぐためだったりとか、家族のためだったりとか、様々な理由で仕事をしなければいけない中、好きなサッカーで突き詰められなかったら、嫌いなことに打ち込めるのかな。ということは、今好きなサッカーをやらせてもらっているこの環境下で、どれだけ100%自分に足りないことに向き合ったり、困難なことに向き合えるかどうか、それが社会に出てからきつといい経験になるということをご日々言っていたような1年だったと思います。

齊藤：監督の声がけというのは、将来社会に出てどういう有為な人材になっていくかを最終的なゴールに据えているような感じを受けます。

監督：そうですね。私自身も公務員という立場で仕事をしながらサッカーをやってきた期間が長かったので、仕事を言い訳にサッカーをおろそかにしたくなかったですし、サッカーを言い訳に仕事をしておろそかにすることもしたくなかった。両方で

いいなと思うことを取り入れて、それぞれの方向で成長できる場面が多くあったので、それを学生自身にも教えたいのです。特に今、新4年生は就活で忙しいんですね。でもそれを言い訳にして「サッカー上手くないか」と言っていて、もどくにでもなるわけではない。就活も100%頑張らなければいけないし、サッカーも100%練習に取り組む。社会に出たときに、「ああ、サッカー部でやってきたことがいきてるな」って思える人生になって欲しいので、だからこそ好きなサッカーで怠けるんじゃないくて、厳しいことをお互いに言いながら、成長して社会に羽ばたいていってほしいんじゃないかなと思いますね。

齊藤：ありがとうございます。改めて、2020年度を振りかえられて、去年のチームにはどのような強みがあったとお考えでしょうか？

監督：そうですね。ひたむきに、愚直に、90分間を通して、チームのために戦い続けられるプレーができる選手が多かったですね。まだまだ試合の流れを見る力は足りなかったと思うのですが、ひたむきにやり続けるというところは、非常に去年のチームの強みだったのかなと。相手チームの試合分析も自分たちでやっていたので、自分たちで考える力は徐々についてきているんじゃないかなと思います。誰かに依存するのではなくて、一人ひとりが当事者意識をもってピッチに立っていた、それが結果につながっていると感じます。前の年に比べたら、テクニックが高い選手はむしろ少なかったかもしれません。ですから、チームの中でも、一人ひとりが力を出し切らないと勝てないということをみんなが理解できていたのかもしれないですね。

齊藤：「ひたむきに愚直にやる」というのはどのようなイメージでしょうか？

監督：3H (Hard work, High speed, Hard tackle) と言っているのですが、90分間、とにかく休むことなく、チームのためにハードワークができる、ハイスピードで切り替えを早くする、ハードタックルで球際を激しくいく、この3Hが基本だよと。

これは戦術ではなくて、「やるかやらないかだ」と言っていて、この3つを当たり前にやることこそが我々のペースだよと。そこに彼らは向き合ってくれたんじゃないかなと思います。

齊藤：ありがとうございます。最後に2021年シーズンの抱負についておungkがしたいと思います。

監督：今いるカテゴリーよりも上、1部リーグを目指すことです。でもそれは簡単なことではないので、一步一步、もしかしたら、半歩半歩かもしれませんが、学生たちが自分たちの好きなサッカーにどれだけ向き合えるかどうかじゃないかなと思います。

好きなサッカーに関する知識を高めるようなことにどのくらい時間を費やせるか、キャンパスで学んでいることをどれくらい好きなサッカーに結びつけて考えることができるかどうか。例えばプレゼンの授業を活かしてミーティングを自分たちでより良くやろうというのもそうですし、経営戦略でしたら、相手の企業よりも強くなるにはどういう組織をつくらなければいけないのかとか、そういうこともサッカーに結び付けることができます。このように、いろいろなものを自分たちの好きなサッカーに結びつけられる力身につけて欲しいなと思いますし、それが自分たちのたどり着きたい1部リーグという場所にたどり着く近道なんじゃないかなと思います。

齊藤：毎年結果が良くなってきているので、学生も自信になってきているのでしょうかね。

監督：そうですね、それは感じます。「自分たちができるんだ」ということをひとつひとつ感じ始めているというか、そこは感じますね。ただやっぱり3歩進んで2歩下がるじゃないですけど、あと戻りしてしまう日もあるので、自信が過信にならないように、ゆっくりでいいから、着実に一步一步踏みしめていた方がいいからとはっきり伝えていきます。

齊藤：2021年度のシーズンもサッカー部の活躍を祈念しております。本日はお忙しい中、誠にありがとうございました。



小湊監督に対するオンラインインタビューの様子

逆境でこそアグレッシブに —本学を卒業したコーチ・職員が語る湘南ベルマーレ—

インタビュー・文：小野田 哲弥

産業能率大学サッカー部コーチ 中村佑馬氏（情報マネジメント学部2012年卒）
株式会社湘南ベルマーレ Sales Unit グッズマーケティング 松本麻希氏（情報マネジメント学部2018年卒）

2020年度は湘南ベルマーレにとってどのような1年だったのか。本学サッカー部の選手・マネージャーを経て同社に就職した二人に、コロナ禍の影響と、その苦難にどう立ち向かったか、挑戦の日々を聞いた。

Jクラブ新卒採用が叶った理由

—本学は貴社（湘南ベルマーレ）との提携が有名なので、「Jリーグクラブで働く」という夢を抱いて受験する高校生や、その夢を持ち続けている在学学生も少なくありません。その「狭き門」をどうやって突破できたのか、まずはお二人の就職の経緯について教えてください。

中村：僕はプロのサッカー選手を目指して産能大に入学しました。ですが、同期や対戦相手のレベルの高さを見て、正直プロになるのは難しいと感じるようになりました。そんな時、今の僕のようにベルマーレフットボールアカデミーから出向してきていた鳥飼（浩之）コーチが、当時、産能大の体育館で練習していた湘南ベルマーレフットサルクラブのサテライトチーム（P.S.T.C.LONDRINA）を紹介してくれました。フットサルにU-23というカテゴリーができた時期だったので、大学3年からは代表選手を目指してフットサル1本で活動していました。そのチームメイトの中に、湘南ベルマーレサッカー学校の小学生サッカー学校【図1】でコーチのアルバイトをしている同期がいて、彼の紹介で僕もコーチのアルバイトをさせてもらうようになりました。大学4年になると、周りは就職活動を始めましたが、好きなことしか続かない自分の性格と、子どもたちにサッカーを教えるのが楽しかったこともあって、アカデミーのリーダーに就職したい気持ちを伝えたところ、ちょうどスタッフに空きが出て、運よく雇ってもらうことができました。

松本：私は、大学4年間はサッカー部でマネージャーをしました。高校生まではプレイヤーとしてサッカーをやっていました。小学校の時、所属クラブの先輩が湘南ベルマーレでプロになり、チームみんなで応援に行くことになって、それがきっかけでベルマーレの試合をよく観に行くようになりました。それからずっと将来の夢として「Jリーグクラブで働きたい」というのがありました。それで高校で進路を考えることになった時、試合会場をよくお会いしているベルマーレの方に相談したところ、「産能大ならベルマーレのインターンもやっているよ」と薦められて、産能大への進学を決意しました。そして実際に、3年生の『インターンシップⅡ』という授業を通してベルマーレで働くことができました。働きぶりが認められたのか、インターン中に「アルバイトでも働いてみたい？」と声をかけていただき、人手が足りないグッズの仕事を手伝わせていただくようになりました。もともとサポーターでグッズに



©SHONAN BELLMARE
図1. 湘南ベルマーレサッカー学校

詳しくあったこともあって重要な仕事を任せていただき、すごくやりがいを感じて、卒業後もアルバイトでいいからこの仕事を続けたいと思うようになりました。結果的に社員になることができましたが、日々の行動のすべてが採用に直結したのだと思っています。

フットサル経験者としての強み

—中村さんは遠回りにも見えるフットサルへの転向がチャンス掴むきっかけになったとは意外でした。松本さんはベルマーレへの一途な思いとインターンやアルバイトでの熱心さが決め手になったのですね。つづけて、就職してから今日までの歩みについても教えてください。

中村：小学生のサッカー学校は、いわゆる習い事なので、とにかくサッカーを楽しんで、好きになってもらえるようにメニューを考えました。それから、ベルマーレは技術だけではなく人間教育も大切にしているので、きちんと挨拶する、道具を大事にする、他人に感謝するなど意識して指導しました。8年間の中で、中学生のコーチも3年間務めました。中学生以上はセレクションの合格が必要で、将来的にプロを目指すカテゴリーになるのですが（【図2】のU-15）、そこでの指導を振り返ると、自分のフットサルでの経験が活かしていた気がします。僕もプレーしてみても初めてわかったのですが、サッカーと同じように思われているフットサルは、実はまったく別の競技です。センターバックをやっていた自分にとって一番衝撃的だったのは、オフサイドというルールがないことでした。サッカーだったら自分とゴールの間に相手選手がいることはまずありえないんですけど、フットサルでは当たり前なので、まったく気が抜けません。サッカーは長い距離を走らなければいけないこともありますが、味方が攻めている時間帯、守りの選手は休めたりもするんですね。でもフットサルの場合、攻守の切り替えが目まぐるしくて、延々にシャトルランをやっている感じです。ピッチも、サッカーは縦105メートル超なのに対してフットサルは40メートルと狭いので、基本的にフリーになるということがなく、マークを外すテクニックや、1対1でボールを奪取れない技術が必要になります。そんなフットサルを経験しているからこそ、ボールを持っていない時の動きには人一番注意が向くので、そこは自分の指導者としての強みだと思っています。ですが、昨年（2020年）11月に産能大のコーチの話をいただいた時には本当に驚きました。自分が在籍していた時よりも格段に強くなっている今の産能大サッカー部を、中学生までしか教えたことのない自分が指導できるのか不安もありました。でも、母校に恩返ししたい気持ちが強かったのと、かつてベルマーレユースのコーチで、僕のことも良く知っている小湊（隆延）監督から電話で直に「一緒にやろう」と言ってもらえて決心が固まりました。



©SHONAN BELLMARE 図2.
湘南ベルマーレの組織体系

松本：私が働いているのは株式会社のトップチームですが、7つのユニットをわずか30人で切り盛りしています。私はSales Unitに所属していて、アルバイト時代から継続してグッズマーケティングを担当していま

す。仕事内容は、グッズを企画したり、デザインすることはもちろん、商品を仕入れて各オフィシャルショップに卸したり、ホームゲームで販売したり、ホームタウンのお祭りやスポンサー様のイベントに出店したりしています。公式サイトやTwitterに載せるグッズの情報も私が作成しています。

普段以上に感じたサポーターのありがたみ

——コロナ禍に見舞われた2020年度は、これまで通りの活動ができない大変な1年だったと思います。様々な制約がある中、どのような取り組みをされたのか教えてください。

松本 たとえば以前のように全員出社して、一人でもコロナに感染してしまったり、全員が濃厚接触者になって試合を運営できる人員が一人もいなくなってしまうんですね。なので、定期的に在宅勤務をするようにシフトを組んで、万が一の場合でも、全員が一斉に休まなくても良い体制を整えています。感染対策もとても気を使っていて、練習の時に選手が蹴るボールも、メニューが一つ終わるごとに1個1個手作業で消毒していますし、選手が使う施設のドアノブもこまめに消毒しています。私の担当でいうと、グッズに選手からサインをもらったりもするのですが、その対応をPCR検査を受けて陰性だった社員しかできないように徹底しています。中断期間があったり、有観客後も人数制限があったりと経営的に厳しい状況ではありますが、普段以上に選手とお客様の力に支えられているありがたみを感じる機会も多いです。選手一人一人が自分に何かできることはないかを探って、自身のSNSを頻繁に更新してくれたり、クラブが行うオンラインのイベントに積極的に協力してくれていますし、昨年実施したクラウドファンディングでは、目標額の5,000万円をはるかに超える85,108,380円を4,541人の皆様からいただくことができました。クラウドファンディングを統括しているのはPromotion Unitになりますが、「返礼品」はグッズの担当なので、どんな返礼品が良いかを考えたり、チラシ【図3】を作成したり、ネットに不慣れなお年寄りの方向けに、スタジアムでもグッズ販売の隣に受付ブースを設けて協力しました。一番大変だったのは発送作業で、ユニフォームだけでもSサイズから3Lサイズまで、背番号も1番から99番まで好きな番号を選ぶので、間違いがないかの照らし合わせや、梱包・発送作業に1か月はかかりました。クラウドファンディングでは、申込の際に必ず「応援コメント」を入力していただくんですけど、熱いコメントを寄せてくださる方がたくさんいらしゃって(<https://readyfor.jp/projects/OneBellmare2020/comments>)にて閲覧可能)、読むたびに本当にこのクラブで働いている幸せを感じています。

中村 サッカースクールは市営のグラウンドを借りていることもあって、1回目の緊急事態宣言で完全に使えなくなったので、オンラインスクールを始めました。Zoom越しでコーチがお手本を見せて、子どもたちにやらせてもらんですけど、当然家の中で思い切りドリブルやキックはできないので、狭いスペースでもできるメニューを工夫しました。それからベルマーレの歴史や選手へのインタビュー、家でできる体操などを収録した動画を制作して、YouTubeでスクール会員の子たちに限定公開したりしました。緊急事態宣言が明けてグラウンドが使えるようになってからも、それまでとはだいぶやり方が変わりました。まず子どもたちがグラウンドに来たら手洗いと健康チェックを徹底しますし、ゴールを決めてもハイタッチ禁止とか、練習が終わったら道具を絶対に消毒するとか。子どもたちとのコミュニケーションが減って寂しい部分もありましたが、感染対策をしっかりしているおかげで、保護者の方が安心してあずけてくださったという印象がありますね。とはいえ対面は不安というご家庭のために、オンラインスクールも同時並行で開講していました。僕自身は去年はジュニアユース(中学生)担当でした。感染対策は一緒に、違いでいうとフィジカルトレーニング、あとはミーティングが多かったですね。オンラインならではの収穫は「サッカー脳」というか、ミーティ

ングで頭のトレーニングを強化できたのは大きかったと思います。実際にそのあと、ドリブルしかできなかった子が臨機応変にパスも出せるようになったりと明らかな成長が見られました。選手獲得という何とんでも「BELLMARE DREAM BOX」が画期的でした。これまでは僕らが小学生の試合を現地に観に行き、有望な選手をスカウトしていたんですけど、コロナ禍で大会自体が行われなくなってしまったので、逆に自分の映像をベルマーレに送ってもらうというオンラインスカウトを始めました。アカデミートップの太田(隆一・ディレクター)さんの発案で、全国のJクラブで初の企画だったので、メディアでも大きく取り上げられ、全国から数百件の応募が届きました。そして実際に今年(2021年)ジュニアユースに18人、女子チームに2人入ることが決まりました。



オンラインでインタビューに応じる松本麻希氏



オンラインでインタビューに応じる中村佑馬氏

先陣を切ってどんどんやろうという風土

——株式会社のクラウドファンディングしかり、アカデミーのオンラインスカウトしかり、感染対策を万全にしながら、新しい試みにも果敢にチャレンジしている共通点を感じました。

中村 確かにベルマーレは、(水谷尚人)社長をはじめ、何か企画が挙がったときに、「こんなリスクあるからやめよう」じゃなくて「いいよ、どんどんやろう!」といった感じで、スピード感をもってすぐに実現できるという雰囲気がありますね。

松本 実はクラウドファンディングは今回が初めてじゃないんですよ。以前フットサルチームでもやっていて、その時は成功とはいえなかったらしいんですけど、その経験が今回に繋がったと聞いています。グッズ関連でいうと、サポーターの皆様にマスクが大好評なんですね。なので今年はホームタウンの小学生全員に配布するんですけど、それも昨年、感染症対策が書かれた「うちわ」を配布した実績があるおかげで、各地域の教育委員会からも歓迎していただけたと思います。なので、今年始めた日本初となる試みの「トークン」もまだどうなるかわかりませんが、将来的には貴重な資産になると感じています。

——最後に、お二人の今の目標を教えてください。

松本 コロナが収束してスタジアムに100パーセントお客様を入れていいよとなったときに、チケットが完売するようなアイデアを出せるように準備したいです。そしてグッズ担当としては、徐々にスタジアムを訪れたお客様が喜んでくれる、どこにもない最先端のグッズを考えたいですね。

中村 産能大からJリーガーを育てたいというのは当然ありますが、ジュニアユースと一緒に、サッカー部でもプロの選手になれるのは一握りなので、社会に出ても恥ずかしくない人材を育てたいですね。と偉そうなことを言っている僕も、大学生時代はコーチから叱られてふてくされていたこともあったんで、OBならではのというか、サッカー部員の気持ちや授業のこともわかる身近な相談相手として、彼らの成長に寄り添っていければと思います。あとは僕らの頃にあった、高校生を呼んで「SANNO CUP」みたいな独自の大会を主催するというイベントを、よりバージョンアップさせて復活させたいですね。サッカー部以外の学生も巻き込んで、そのあと大山の旅館に泊まるといった企画も面白いですし。当時の僕にはそういった発想はなかったんですけど、地域に支えられているベルマーレで働いた経験から、地域の方々と一緒に、地元を盛り上げていけるような取り組みを、サッカー部を軸にして展開していけたらと思っています。

04

コロナ禍におけるプロ野球観戦イベントのマネジメント

インタビュー・文：椎野 睦



産業能率大学（情報マネジメント学部）には、横浜DeNAベイスターズとのコラボレーション授業である「スポーツ・プロモーション」という科目があります。その科目では「産業能率大学スペシャルゲーム」と題してプロ野球イースタン・リーグ公式戦1試合を学生自らの手でマネジメントします。本稿では、2020年8月7日に横須賀スタジアムで開催された「産業能率大学スペシャルゲーム2020」を安全かつ盛況にマネジメントした代表学生の森 美貴さん（情報マネジメント学部2年）にインタビューを行いました。

2020年の産業能率大学スペシャルゲームは「びかびかYOKOSUKA大作戦」というイベント名がついていましたが、これはどのような目的から決定したのですか？

まず、この「びかびかYOKOSUKA大作戦」というイベント名には、私たち履修者の深い思いが込められています。2020年は新型コロナウイルス感染拡大により、多くのことに制限がかかりました。プロ野球では公式戦の中止や延期が続き、高校野球では高校球児の夢でもある甲子園が中止となりました。また、私たちがイベント名やイベント内容を考えていた5・6月の時期は、新型コロナウイルスの影響で連日悲しい話題がニュースを飛び交い、心が暗く沈んでしまう、そのような辛く悲しい毎日でした。ですが、その状況下だからこそ、私たちにこのイベントを通じて何かできることがあるのではないかと思います。制限がかかった状況でもできる限りの最大限のことを精一杯行って、暗く沈んでしまっている現在の世の中に希望の光を届けることが、このイベントをやる意味だと思いました。まずは、私たちがイベントを行う横須賀から希望の光を届けていこう、そのような思いを込めて「びかびかYOKOSUKA大作戦」というイベント名をつけました。

どのようなことに苦労しましたか？

このイベントの企画・運営を通じて、私が一番苦労したことは、対面して話し合いをすることが許されず、すべてリモートでイベン

ト企画を進めなければならなかったことです。例年であれば、毎日のように顔を合わせて話し合いを行っていました。ですが、新型コロナウイルスの影響で大学の授業はリモート授業となり、それに伴いこのスポーツ・プロモーションもリモート授業となってしまいました。話し合いを行うことが一番重要な過程であるにも関わらず、会うことが許されず、前例のない形でイベント企画を進めなければならませんでした。リモートであるため、対面よりも話が行き違いになってしまうことが多く、履修者同士の意見のすれ違いや言い合いも頻繁に起き、先生方や球団職員の方にも迷惑をかけてしまったことが多くありました。また、約40人の意見をリモート上で汲み取りまとめることは、想像をはるかに超える難しさであり、本当に苦労しました。さらに、新型コロナウイルスの影響でイベントが本当に開催できるかもわからない、そのような状況の中で、履修者のやる気を引き上げることは、本当に難しかったです。また、本番当日は35℃を越える炎天下で、熱中症の対策と感染症の対策の両立も本当に大変でした。

過酷な状況下でも、やってよかったと思えるようなことはありましたか？

私はスポーツ・プロモーションを履修するまでは、何十人もの意見をまとめたり、大事な決断を下す、という経験をしたことがなく、どちらかといえばそのようなリーダー的役割は苦手であり、これま

ですと避けてきました。ですが、入学前からスポーツ・プロモーションを履修したい、これまでの野球経験を活かしたいという強い思いから、リーダーに立候補して挑戦してみようと履修前から決めていました。リーダーに就任してから、私はとにかく「全員が全力を尽くせる環境を整えること」を常に大事にしました。履修者40人にはそれぞれ個性があるため、もちろん意見が何個もでて当たり前だと思います。話し合いの際に、意見の違いでぶつかり合うことも多くありましたが、私は絶対に多数決は採用しないと決めていました。イベントを決める際に大事なことは票の大小ではなく、アイデアの質だと思っており、意見が採用されなかった立場の人のことを考えれば、やる気を損ねてしまう可能性もあると思ったからです。リーダーとしてメンバーのやる気が損なわれてしまうというのは一番避けたいことだったため、常にどうすれば全員が納得する形で決定できるかを考えていました。また、時にはどうしても意見がまとまらないこともあり、その時にはリーダーである私自身が決定を下すことも大事なことだと学びました。スポーツ・プロモーションでリーダーを務めたことによって、リーダーシップ力を身に付けることができたと思っており、将来にも活かすことができる力を身に付けられたことが、このスポーツ・プロモーションを履修してよかったと思う点です。

この科目を履修しようと思ったのはいつごろからですか？

私は、このスポーツ・プロモーションという科目を履修したくて産業能率大学に入学したといっても過言ではありません。物心ついたときには野球が好きで、ずっと野球に携わってきた人生だったため、将来は野球に携わる仕事に就きたい、そのように中学生の時から思っていました。大学選びの際に、スポーツについて学べる大学はないかと探していたときに、この産業能率大学情報マネジメント学部を見つけました。私が履修したスポーツ・プロモーションは、実際にプロ野球の試合に携わり、球団職員の方と一緒にイベント運営をできると知り、実践的にスポーツビジネスを学ぶことができる産業能率大学に入学したら、将来の夢を叶えることができるのではないかと、そう思いました。

昔から野球が好きだったようですが、いつごろからですか？

私は幼いころから、父が少年野球チームの監督をしていたことや、兄2人が野球を習っていた影響を受け、野球一家で育ちました。小学校低学年のときの土日は、毎日のように兄の少年野球を見に行き、練習の手伝いをしたり、試合の際には母と一緒にスコアを書いたり、気づいたら自分自身が練習にも参加していました。夜の食卓では、常に野球に関するテレビが流れるほど、本当に野球に染まった日々を過ごし、気づいたときには野球が本当に好きになっ

ていました。その後、部活に入部し野球部のマネージャーを務めました。高校に入って、私が在籍していた高校が公式戦で大和スタジアムの運営を行う代表校であった影響を受け、球場アナウンスに出会い、選手のサポートをする傍ら、球場アナウンスの練習を毎日行い、球場アナウンスに力を入れる日々でした。最初は何気ない気持ちで練習を始めた野球アナウンスでしたが、練習していくうちに、「選手が甲子園球場で試合をしているように感じるアナウンスをしたい」、「球場に足を運んでくださった方の印象に残るようなアナウンスをしたい」と思うようになりました。そして、その努力が報われ高校2年生のときに、SNSに私のアナウンス動画がアップされ、この人のアナウンスすごいとたくさんの方に褒めていただいて、「あなたのアナウンス聞きにまた来るね」とか、「アナウンスで感動したのは初めて」など言ってくれる、自分にとって初めて「ファン」という存在ができました。12年間の野球人生の中で、野球というスポーツがどれだけ人に感動を与えたり、勇気を与えるのかを身に染みて実感してきましたが、そのときに、野球はプレーだけじゃなくて、アナウンスといった支える側、運営する側にも、誰かに感動や元気を届けることができるのだなということに気づきました。それ以来、将来は野球を裏で運営する側で活躍したい、とより一層強く思うようになりました。その後も、大和スタジアムで行われる公式戦で、大事な試合のアナウンスを任せられたりすることも多くなり、引退してからも大和スタジアムでアナウンスを担当する後輩マネージャーにアナウンスを指導する機会をいただくこともありました。

最後に一言お願いします。

今年度のスポーツ・プロモーションは、新型コロナウイルスの影響を受け、前例のない形でスタートし、様々な困難な壁にぶつかりながら進めてまいりました。新型コロナウイルス感染拡大が続き、イベントを開催することに対し多くの心配の声も上がる中、「びかびかYOKOSUKA大作戦」が無事に成功したのは、大学関係者様、そしてスポーツ・マネジメント研究所の皆様の支援を賜り、支えていただいたからだと思っています。私は、産業能率大学に入学し、ずっと履修したいと思っていたスポーツ・プロモーションのリーダーに挑戦しました。新型コロナウイルスの影響を受け、例年以上に困難な壁にぶつかりましたが、だからこそ人としてより成長できたと思っています。これまでのスポーツ・プロモーションとは違う形でイベントを開催した2020年という特別な年に、リーダーとしてイベントに携わり、このような活躍の場をいただけたことを心から嬉しく思っていると同時に、本当に感謝しております。スポーツ・プロモーションで得た経験は、将来に活かすことができる貴重な体験であり、スポーツ・プロモーションを履修した半年間は、人生の中で一番頑張ろうと思えた半年間でした。ありがとうございました。



05

コロナ禍における、 小学生ビーチバレーボール大会 「SANNO CUP」の開催

情報マネジメント学部 3年 宮園 日加里

新型コロナウイルス感染症の拡大が懸念された昨秋に、万全の感染防止対策を講じてSANNO CUPを成功に導いた学生実行委員である宮園日加里さんにその取り組みについて寄稿して頂きました。

【SANNO CUPについて教えてください】

SANNO CUPとは、本学情報マネジメント学部2年生の通年集中科目である、「イベントプロデュース」の一環として行われる小学生ビーチバレーボール大会です。この大会では、最終目標として、小学生のビーチバレーボールの全国大会へと発展させることを掲げています。また、大会スポンサーの獲得から、開催概要や競技規則の策定、当日の大会運営までをすべて学生主体で行うことがこの授業の特徴となります。今年度の大会は新型コロナウイルスの影響もあり、規模縮小を余儀なくされましたが、無事に開催することができました。

【コロナ禍での開催にあたって最も配慮した点は何ですか？】

最も配慮した点は、コロナ対策です。今年は、コロナ禍での大会開催となりましたので、コロナ対策を万全にとったうえでの開催とすることを決めました。そこで、コロナ対策を専門に扱う、衛生対策班を設置しました。衛生対策班は、例年行ってきたケガ防止対策に加え新型コロナ感染症対策を専門とし、活動を行いました。私もそのメンバーの一人として活動しました。衛生対策班として活動をするにあたり、いかに来場者の方々に安心して試合に専念していただける環境を作れるかを常に意識し、考えながら活動を行いました。コロナ対策として、徹底した消毒と三密回避を重要視しました。徹底した消毒を行うために、会場各所に消毒液を設置することはもちろんですが、ドアノブやベンチ、机、などの備品を使用する人が変わるたびに消毒を行いました。また三密回避のため、例年屋内に設置していた選手の待機場所を屋外に設置し、トイレの使用箇所も配慮しました。



スタッフポロシャツを手にする宮園さん

【コロナ対策において苦労したことは何ですか？】

コロナ対策において苦労したことは、信憑性の高い情報を集め、集めた情報をどうやって大会運営に組み込んでいくかということです。世界的に、外出できなかったり、人と会うことが出来なかったりと、初めての状況に陥りました。対面のイベントが

ほとんど開催されない時期が続いていましたので、イベント開催においてどういった点に配慮して行すべきか、またビーチバレーボールという競技を行う際にはどういった点に配慮して行すべきかなどの情報をあまり得ることが出来ませんでした。

さらに、徹底したコロナ対策も大切ですが、コロナ対策をしすぎるあまり、大会や競技自体に支障が出てしまう場合もあります。当初は、コロナ対策についての議論のみで進めてしまったため、それが大会や競技全体の“質”にどのような影響を及ぼしてしまうのかに対する配慮が出来ていませんでした。大会の“質”を落とすことなく万全なコロナ対策を行うためにはどうしたらいいかを考え、実際にシミュレーションを行い、改善していくという作業を何回も繰り返し行いました。

【コロナ禍でイベントを開催した意義についてどう考えていますか？】

今回、コロナ禍でもビーチバレーボール大会を開催できたことの意義はとても大きいと思います。満足に集まって体を動かすことが出来なかったり、試合が出来なかったりといった状況が続いた中で、参加された小学生がのびのびとプレーをし、試合に打ち込んでいる姿を見ることが出来てとても嬉しかったです。大会準備の段階では、当日の小学生の様子や会場の熱気などを知ることはできないので、大会当日に真剣に戦う姿や、空き時間を楽しむ姿をみて、自分たちのこれまでの活動が実を結んだように感じました。また、6年生の選手達にとっては、大会に参加できたことで最後の思い出づくりの1ページを飾る特別な“場”の提供ができたのではないかと思います。私たち学生にとっても、貴重な経験となり、例年では学べなかったことも学ぶことができたと思います。

【最後にSANNO CUPをやり遂げてみての思いを聞かせて下さい】

私はイベントプロデュースが始まった当初は、自分に何ができるのか全く分かりませんでしたし、自信もありませんでした。実際、失敗ばかりでした。ですが、仲間たちや先生方と大会開催に向け一生懸命取り組んでいくうちに、自分ならできるという気持ちを持つことができました。コロナ禍ということもあり、学びの場を奪われてしまった方も多くいると思います。そういった状況の中、このような経験をさせていただき、濃い時間を過ごすことができました。また、学生にも関わらず、真剣に意見をぶつけてくださった、先生方やご協力いただきました大会関係者の方々にもとても感謝しております。学生主体ではありますが、周りの方々の協力がなければ絶対に成し遂げることはできなかったと思います。そして、何もわからないなか手探りで進んでいましたが、何もわからないからこそ、多くの可能性を考え、議論し、実践し、失敗し、長い時間一緒に取り組んできた仲間たちと無事に終わることができてとてもいい時間を過ごすことができました。この経験を無駄にしないように、これからも成長したいと思っています。



実行委員会にて活動する宮園さん



大会開会式の様子

06

オンライントークイベント 「OB・OGが語るスポーツビジネス の魅力とこれから」を開催

情報マネジメント学部 教授 中川 直樹

2021年3月18日にトークイベント「OB・OGが語るスポーツビジネスの魅力とこれから」をオンラインにて開催した。

このイベントの開催目的は、本学スポーツマネジメントコースで学ぼうと考えている、あるいは学んでいる1、2年生を対象に、コース科目を中心とした学びが将来のキャリア形成にどのように結び付くのかを知ってもらうこと、そして将来スポーツビジネスへの就職を考えている学生が、どのようにしたらその目標に近づけるのかを知ってもらうことで、今後の学修計画やキャリア形成に役立てることである。

イベントの登壇者には本学情報マネジメント学部の卒業生であり、スポーツマネジメントコースにて学んだ佐藤貴雄氏（株式会社横浜フリースポーツクラブ、競技運営担当）、島田皓介氏（株式会社セレッソ大阪、プロモーションユニット）、松本麻希氏（株式会社湘南ベルマーレ、セールスユニット）に加え、ゲストとして株式会社湘南ベルマーレから宝代智幸氏（セールスユニット）が参加した。また、参加者として在学生32名（1年生15名、2年生15名、3・4年生2名）が参加した。

このトークイベントは筆者をモデレータとして進行し、各登壇者の自己紹介に引き続いて大学時代の役立った学び、キャリアにつながる活動、就職活動について、スポーツビジネスの魅力とやりがい、そしてスポーツビジネスの課題等を語ってもらった。以下に各登壇者からの発言の要旨をまとめた。

①大学時代の学びや活動について

佐藤：高校の部活動の顧問からの紹介で、大学3年生の時に横浜FCでのインターンシップを紹介してもらった。その後、4年生となっても自発的にインターンシップの継続を願い出たところ、少しずつ任される仕事が多くなり最終的に新卒として採用して頂いた。大学時代の学びで大切だと今思うのは、パソコンでの仕事の行い方、特にエクセルについては熟知しておいた方が良いと思う。また、映像編集の技術があると役立つ。

島田：大学3年生の時に横浜DeNAベイスターズでインターンシップに参加。その時、周りには有名大学の学生が多くおり、競い合うために大学の中で一番勉強をしたと思う。その勉強方法というのは、現場で起きていることを数多く見て、このイベントが行われている理由やこの運営手段を取っている背景など、コトの本質をしっかりと理解しようとしたことだ。分からなければ、社員の方に良く質問したいし、必要であれば本を読んだりもした。その姿を見ていたスポーツマネジメント会社の方から声をかけて頂き、セレッソ大阪への就職につながっている。

松本：高1の時に知り合いの方から湘南ベルマーレの女性社員を紹介して頂く。その姿に憧れ、社員として働きたいと思い湘南ベルマーレとつながりのある本学へ入学した。その後、インターンシップへ参加したり、アルバイトを行ったりして関係を築くようにした。就職活動は、せっかく4年間で築き上げたクラブとの関係性を無駄にしないように活動は全く行わなかった。それが功を奏して採用のお話を頂いた。大学時代にしっかり学んでおいた方が良いと思うことは、パソコンの操作である。また、大学で学んだことが、まさかここでと思うようなタイミングで役立つことがよくある。さらに、サッカーだけではなく、様々な分野で行われていることを現場に行ってみたり体験したりして、自分であつたらこうするなどと考える習慣を身に着けると良いと思う。

宝代：大学時代は、自分がいる環境で携わっていることをとことん全力で行っていた。自分は子どもにサッカーを教える活動を行っていたが、それが、様々な学びにつながったし、自分が成長するきっかけともなった。就職活動は、はじめは自分の軸を持たずに手あたり次第手を付けていたが、自己理解を深く掘り下げるようにしたら結果が伴うようになった。

②スポーツビジネスの魅力、やりがいと課題

佐藤：チームが近くにいる臨場感を味わえるのが魅力でありやりがいだと思う。自分が感じている課題は、チームへのお金を生み出せる人材を一人でも多くすることかなと思う。

島田：自分が仕掛けたプロモーションがニュースとなってメディアに取り上げられた時は何とも言えない嬉しさがある。また、ホームゲームでの入場者数が多かった時も嬉しい。Jクラブといっても小さなクラブであるので、様々な経験が積めることが今の仕事の醍醐味である。この経験を基にさらにキャリアのステップを踏んでいきたい。課題としては、スポーツ業界、サッカー業界といった限定的な視点からの評価に留まることなく、もっと上を目指す姿勢を貫くことだと考えている。

目的：
スポーツビジネスに興味、関心を抱く学生に、スポーツ業界で活躍する本学OB・OGから、現在から将来へのキャリアパスを語ってもらう。現在取り組んでいる業務や、さらには将来の夢を語ってもらうことで、学生がこれからの学修計画を考える上での一助とする機会にしたい。



松本：私はクラブチームのグッズ担当もしているのですが、街中でファンの方が手掛けたグッズを身に付けていたり持っていたりする姿を見かけると嬉しくなる。特に最近ではクラブに女性スタッフが増え、女性目線で企画した商品であれば尚更である。現在は収容観客数を制限しているのですが、コロナが収まった後にどうしたら満員のスタジアムに戻るのかを考えると不安になる。

宝代：スポンサー営業に行き様々な人とつながれ、湘南ベルマーレの価値を実感できた時が一番やりがいを感じる。年間20試合程しかないホームゲーム以外でいかに多くの人と関わりを持つか、また、様々な場面においてデジタルツールをいかに活用するかが今後の課題ではないかと考えている。

トークイベントを終えて

今回のトークイベントを開催するにあたって最も意識したことは、学生時代の学びがどのようにスポーツビジネスの舞台に立てることにつながったのかを参加者に伝えることである。開催日となった3月中旬は新学期が目前となった時期であり、1年生である学生は2年生から始まる専門コース選択を考える時期であり、2年生は3年生となり自分の進路選択を意識した学修を行う時期となる。今回参加した学生への事前アンケートにおいて参加理由を問うと、「スポーツマネジメントコースの選択を検討しているがより詳しい情報を得られると考えて」、「スポーツビジネスに興味があるので今後の参考に」という回答が多く見られた。さらに「在学中にどのような科目を履修したのか」、「サッカーのクラブに就職するために取得しておいた方が良い資格はあるか」などの回答も多かった。こうした回答からは、スポーツマネジメントコースでの履修やスポーツビジネスへの就職に興味がある学生が学生時代の学びについてより具体的な

学生からのコメント



1 年生女子

「思っていた以上に参考になりました」

特に大学生活でできることや今やっておいた方が良いことの再確認ができました。スポーツ業界に拘った結果として努力が実ったこと、優越的な大学生活を送ったことが良く伝わりました。自分の可能性を広げられる今を大事に過ごすことができるように頑張りたいです。また、部署の業務内容の説明がとても丁寧でしたので、非常にスポーツ業界に興味が増えました。



2 年生女子

「挑戦して失敗もしながら、力をつけていくべき」

大学においてやっていたことで活きているものを知れて、これから私も力を入れたいと思いました。ただスポーツが好きだからという理由でスポーツ関係の職に就くのではなく、スポンサーを手に入れ企業の収入に繋げられよう、お金を生み出せるような仕事ができなければならないのだと分かりました。



2 年生男子

「自分が今後すべきことが明確になった」

普段、聞くことのできない収益の内訳や業務の詳細等の話を通して、自分が考えていたスポーツビジネスの世界は甘かったなと感じた。資格は不要とまではいかないが、何よりも自分の行動力が大事なのだと改めて思いました。



2 年生女子

「試合に多く出る、席に多く立つ」ことが大事

自分と年が近い卒業生のスポーツビジネスの第一線で働いている方のお話を聞くことができる、あまりないイベントだったのでありがたかったです。試合内容や打席の結果がよいものではなかったとしても、何もしていない人より改善点も反省点も見つかり、次回に生かすことができると思うので、与えられたチャンスを逃さないことと自分からそのチャンスを掴みに行ければいいなと思いました。ずっとやりたかったインターンの説明会に参加できてどうしようか迷っていたのですが、やってみる決心ができました。



2 年生男子

「貴重な先輩の経験談が聞けて良かった」

今回のお話で、今の現場にどんな経緯でいるのかやどうなことがこの業界に必要なのか、また、苦労した話を聞くことが出来てよかったです。自分で調べられること以上の価値があったし、今自分がすべきことや、方向性も見えてきた。



1 年生女子

「新学年が始まる前に今一度気を引き締める」

先輩方のお話を聞いて、就活に対しての考えを改めなければいけないと思いました。特にインターンシップについては、甘く見ていたような気がします。また、周りにいる先生や先輩など人の力を借りてチャンスを自分のものにしていくことも大切なのかなと思いました。恐れず多くのことに挑戦すること、面倒くさがらずに取り組んでいくことが、将来の自分につながるのだと改めて思いました。



1 年生男子

「将来ベルマーレに就職したい」

この学校で学んだ先輩が実際に自分の目標としているチームで働いて、体験談や経験を知ることができることはとても貴重な時間でした。また、自分に足りないことを見つけることができ今後の学習の意欲につながりました。



1 年生男子



1 年生男子



1 年生男子

大学生活は自分と向き合う、何か新しいことを創造する時間だということを思いながら生活していきたいと思いました。

今回開催された先輩方のお話を聞いて、自分の就職活動に対する不安が少し和らいだように感じ、これからの自分へのやる気、エネルギーに代わっていくよう感じました。

私は今どのコースにしようか、迷っており、現在活躍されている方々のお話を聞き、自分の進路に大きく活かしていきたいです。

情報を求めて参加していることが推測できる。つまり、先輩方は、スポーツマネジメントコースでの学びに加えてどのようなキャリア形成につながる活動を行っていたのかについての情報を求めているということである。実際にイベント後のアンケートの回答に「先輩方の話を聞いてどのコースで学ぼうか迷っていたのでとても参考になった」、「漠然とスポーツビジネスをやってみようという漠然とした思いで入学したが、先輩方の話からその魅力や厳しさについて知ることができ参考になった」という回答が寄せられていた。

また、今回登壇して頂いた全員がスポーツマネジメントコースにおいて学んだOB・OGであったことも重要なポイントであったと考えている。本学においても、卒業生からの就職活動体験談を聞く機会は多い。しかし、参加した学生が本当の意味で自分のロールモデルとして重ねられる卒業生から話を聞ける機会はそう多くはないはずである。自分達と同じ夢を持っていた先輩方が、学生時代に何を考え、実際にどのように行動してその夢を叶えたのかについて今回語ってもらえたことは強烈なメッセージとなって参加者に届いたことは間違いないと思われる。

田澤と須藤(2008)は、低学年向けのキャリア形成支援では、意識づけ、きっかけづくり、大まかなキャリアのデザインをすることが求められているとしている。本学はスポーツマネジメント、スポーツビジネスへの興味・関心から入学をしてくる学生が相応にいる。しかし、実際にスポーツビジネスに関連した職業に就く学生はそれほど多くない。これは主観的な印象でしかないが、スポーツマネジメントコースでの履修あるいはスポーツビジネス業界への就職の取捨選択を学生は2年生から3年生の前学期までに行っているのではないかと感じている。したがって、そのような時期に、自分のロールモデルに合致する先輩方から話を聞く機会を設けることは有効なキャリア支援となるのではないだろうか。もちろん、今回とは逆にスポーツマネジメントコースで履修したものの、スポーツビジネス業界を選択しなかった先輩からの話を聞くことも重要であると考えている。

参考文献

田澤 実、須藤 智：OB・OG、大学4年生のキャリア講話による低学年の大学生を対象にしたキャリア支援：卒業生による自主企画を例にして、生涯学習とキャリアデザイン、5：75-86、2008。

コロナ禍が我々の生活に多大な影響を及ぼし始めて1年半が経過した。度重なる緊急事態宣言によって、飲食業をはじめ、これまで対面でのサービスを通じてビジネスを行ってきた業界は、致命的な打撃を受けることとなった。今回の災禍は、日本にとって初めてとも言ってもよい経験であり、場当たり的な対応になったとしても、これはある程度許容するしかない。しかしながら、今後もし、何らかの災禍があったときに、今回と同じ轍を踏まないためにも、有事に備えた準備は不可欠だ。今回はスポーツ業界を例にとり、エンタテインメント関連産業のリスクマネジメントについて考察するが、結論から言えば、この業界は構造的に無観客では成立しないビジネスモデルである。無観客でも数年間は耐えられるビジネスモデルの構築が当面の課題となる事を想定している。

1. コロナ禍が明らかにしたイベント産業の脆弱性

周知の通り、新型コロナの影響により多くのスポーツやそれに関連するイベントが中止や延期に追い込まれた。オリンピックは言うに及ばず、プロ野球、サッカー、バスケットボールといったプロリーグ、夏の高校野球、インターハイといった学生スポーツ、果てはジョギングや散歩まで、ほぼ全てが影響を受けた。

今回の災禍で明らかになったのは、スポーツをはじめとしたイベント系の産業の大半が、対面での興業やイベントが禁止された場合、ビジネスの基盤が極めて脆弱であるということだ。台風などの自然災害なら、短期間で収束するため大きな被害にはならなかったが、これほどの長い期間、試合や公演が中止させられた記録はない。こうしたリスクに対する準備ができていなかった事を指摘する論評は多いが、重要なのは再び新たなウイルスなどによる災厄が起こったとき、今回の経験を教訓として、当該ビジネスを守っていく態勢を整えておくことである。

2. プロ・スポーツの対応策

2-1. プロ・スポーツのコロナへの対応

では、今回のコロナ禍に対して、スポーツ界はどのような対応策を図ってきたのであろうか。まずその点について整理しておく。プロ・スポーツは今回、国や自治体の方針を勘案しながら、まず当面の試合を自粛するという方策をとった。一部、無観客での試合開催を実施してみるなど、様子見な動きは見られたが、政府の緊急事態宣言が出される以前から、開幕延期を決めたスポーツが多かった。まず、起こった対応は「無観客での試合再開」である。プロ野球などをみると、無観客→入場制限した観客の受け入れと進み、徐々に人数を増やす→解禁という、おおよそ3段階のステップを想定していたように見える。延期や中止をしている間、多くのプロ・スポーツでは来たるべき再開のために準備を進めた。まず観客数を半分程度に設定し、ソーシャルディスタンスを考慮した座席の配置、入場に際しての体温管理、消毒液の徹底、マスク着用の徹底、フード販売の自粛など飲食

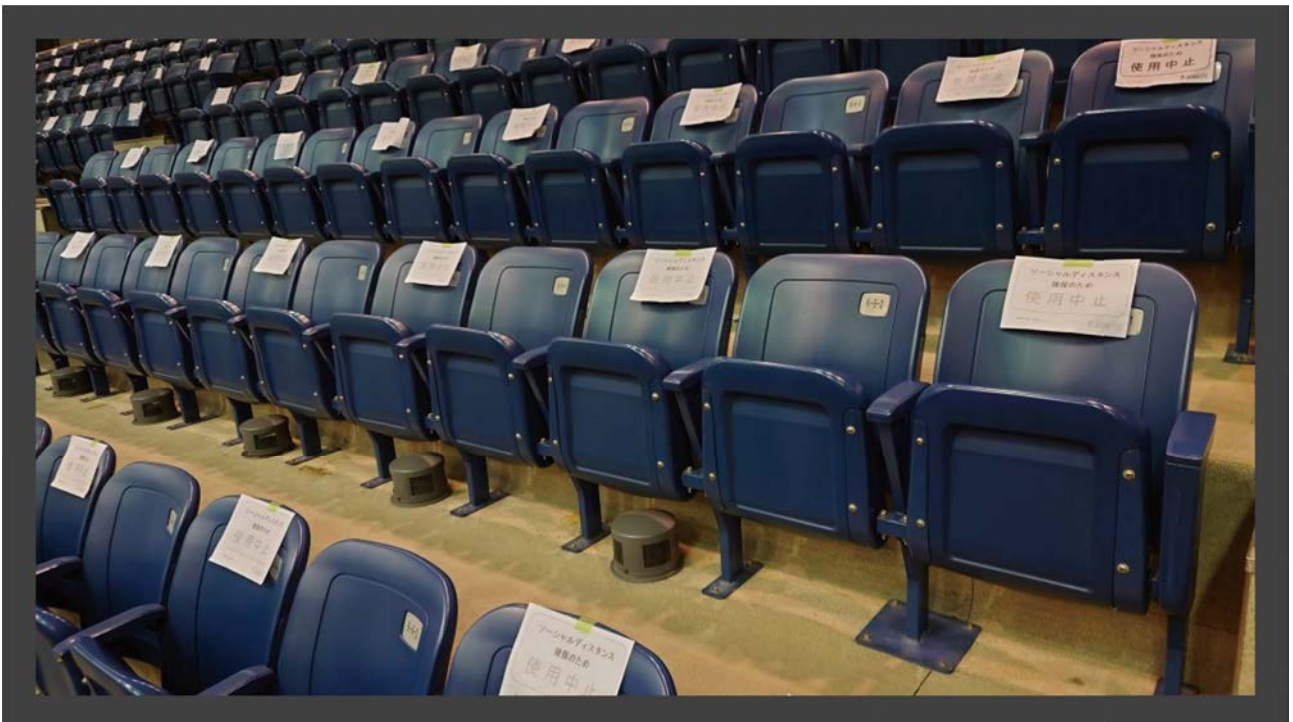


図1：観客席を間引きした試合会場

店さながらの防御体制を整えた。こうした緊急事態宣言やまん延防止等重点措置などによる自粛期間は、当初想定していたよりも長くなり、無観客や入場制限下での試合開催は徐々に、スポーツビジネスの体力を削いでいく結果となった。

2-2. プロ・スポーツにおける収入割合

ここで、プロ・スポーツの収入割合について確認しておこう。

プロ・スポーツの収入源としては、種目によって内容やその割合には隔たりがあるものの、主なものとしては「入場料収入」、「スポンサー（広告）収入」、「物販収入」、「ユース・スクール関連収入」、「配分金」の5つがある（図2参照）。

おおよその収入を理解するために、ここでは収益構造を公表しているJリーグの収益構造（Jリーグ発表資料）をベースにみていくことにする。Jリーグにおける収益の内訳をみると、「スポンサー収入」が45%、「入場料収入」が20%、「物販収入」10%、「スクール関連収入」3%「Jリーグ配分金」10%、その他12%程度となっている。今回のコロナ禍によって「入場料収入」は大幅に減少した。無観客試合や入場制限によって壊滅的ともいえる打撃を受けた。また多くの試合で、人数制限した試合開催でも、空席が目立ったという。おそらく密になることを恐れたファンも多かったのではないと思われる。実際に2020年秋以降の試合の記録を見ても、上限に達していない試合が多かった。大幅に減少したのは「入場料収入」だけではない。無観客や観客制限試合が多くなることで、物販収入も大幅減となった。単純に考えてもこれだけで30%の収入が失われたことになる。頼みの綱となるのは「スポンサー収入」である。

しかしこれも、不透明な部分は残る。多くのスポンサーは広告や宣伝を目的としてスポンサードしているところが多い。無観客や制限下での試合が続けば、撤退を検討するスポンサーも出てくるだろう。何よりコロナ不況によって、スポンサードそのものが難しくなってくることも予想される。「スクール関連収入」も中止や延期が多くなったことで増収は見込むべくもない。

「配分金」はスポーツ種目によって大きく異なってくる。特にTVによる放映権収入があるスポーツは、まだ恵まれていると言える。例えばJリーグは、2017年からDAZNとの契約によって巨額の放映権料を獲得した。その金額は10年総額で2100億円とも言われており、今回のような災禍のなかでは大きな効力をもつこととなった。クラブへの配分金も86億円程度（J1：2020年度「Jリーグ発表資料より」）となっており、経営の安定化に大きく寄与したといえる。

ただいずれにしても、財務的には壊滅的ともいえる状況にあることには変わりない。事実、Jリーグの2020年度の決算では、超厳戒態勢でのリモートマッチや厳戒態勢で入場者数を制

限して試合運営を行ったことで、入場料収入が前年度と比較し約6割減、単年度赤字を記録したチームは53クラブ中34クラブ、営業収入は53クラブ合計で998億円（前年比▲230億円）となった。

3. 鍵となるオンライン・ビジネスの可能性

今回のコロナ禍に対して、スポーツ界のみならずエンターテインメント産業など、集客して観客を必要とするビジネスでは様々な対応策が企画され、実施された。その柱となったのが、デジタル化である。例えばコンサート等では有料の配信ライブが早々に行われ、スマートフォンを利用したファンとのミーティングなどが行われるなど、対応の早さを見せた。スポーツ界でもスタジアムのビジョンでファンの顔やメッセージを掲出したり、ZOOMなどを活用したファンミーティングなども行われた。今後は5G（第5世代移動通信システム）を活用したVR（仮想現実）での配信なども検討されている。さらに、既にプロ野球やJリーグで実施されている「ギフティング」（オンラインを利用しチームや選手などに現金などを提供するもの）や「ベッティング」（totoなどのように試合結果を賭けの対象とするもの）の推進なども、今後の課題となっている。

スポーツ界全体の発展という視点から考えると、こうした試みは今回の災禍が収束してもしなくても進めていくことが必要だ。

4. 今後の可能性

2021年6月の現時点では、直ちにスポーツ観戦が元に戻ることは考えられないが、希望的な観測も含めて、ワクチンの接種が進み治療薬が開発されたときに向けて、ITの積極的活用などさらなる準備を進めていくことが求められている。ただスポーツビジネスは、観客を集めて試合やイベントを行うことが大前提であり、例えばVRを利用した試合観戦がリアルを超えることは現状の技術では難しい。何より現場での一体感が作り出す雰囲気、異空間にいるような臨場感はスポーツが持つ最大の武器である。

観客が安心して観戦できる時に備えつつ、今は耐えていかなければならない。この主軸を維持することを第一としつつ、新たな収益源を模索していくことが必要だ。コロナ禍が収束したとき、従来の収益源に加え、新たな収益源が出現していることを目指して今回の危機を乗り越えてほしい。

（参考文献）

・Jリーグ「2020年度クラブ経営情報開示資料（先行発表）」、2021年5月28日発表、公益社団法人日本プロサッカーリーグクラブ経営本部クラブライセンス事務局、2021年6月7日アクセス、
https://www.jleague.jp/docs/aboutj/club-r2kaiji_001.pdf

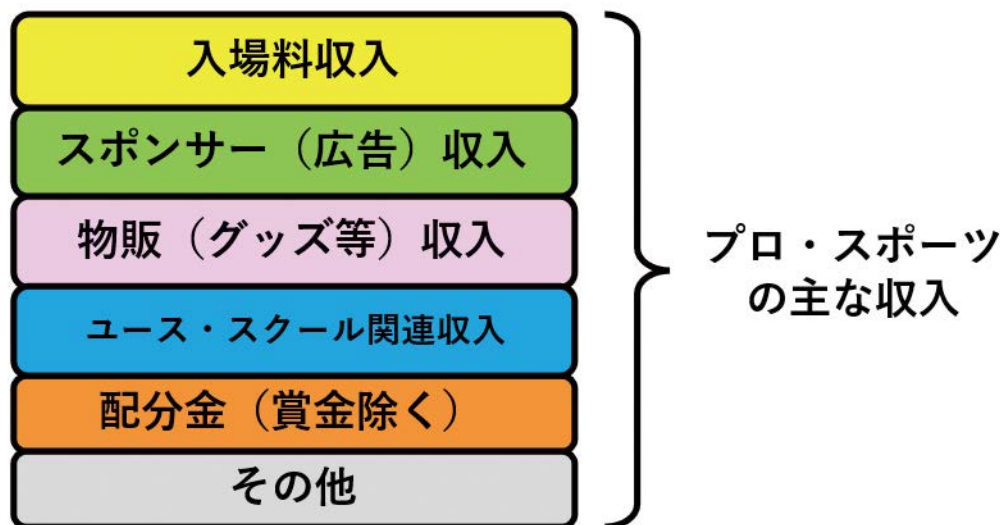


図2：プロ・スポーツの主な収入源

「大学運動部サポートプログラム：第4期リーダーシップ養成プログラムの実施」

経営学部 教授 齊藤 弘通

本学スポーツマネジメント研究所では、本学運動部員のキャリア形成や人間的成長を支援するためのサポートプログラムを展開し、本稿で述べる「リーダーシップ養成プログラム」もその1つとして位置づけられている。本稿では、2020年度、大学運動部特別強化クラブ部員に対して実施した「第4期リーダーシップ養成プログラム」の概要と今後の課題を述べる。

1. はじめに

筆者は、本学運動部員を対象とした「リーダーシップ養成プログラム」の企画および講師を担当している。2020年度は、大学の特別強化クラブであるサッカー部、女子ビーチバレー部、バレー部、野球部の選抜メンバー12名（2年生11名・3年生1名）に対して、2020年11月から12月にかけて全5回の研修を実施した。

例年は、対面形式で研修を実施しているが、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響から、オンライン会議システム「ZOOM」による研修となった。以下が全5回の研修概要である。

図表1：第4期リーダーシップ養成プログラム概要

回数	概要
第1回 11月12日（木） 5限（17:10～18:50）	- 自己紹介 アイスブレイク - リーダーシップとは何か - リーダーシップ自己診断 - リーダーシップを発揮するために必要な項目
第2回 11月19日（木） 5限（17:10～18:50）	- リーダーシップ項目の理解～①論理性を高める - ロジカルな指示の出し方
第3回 11月26日（木） 5限（17:10～18:50）	- リーダーシップ項目の理解～②問いかけ力を高める - 効果的なファシリテーションの方法
第4回 12月3日（木） 5限（17:10～18:50）	- リーダーシップ項目の理解～③受容性を高める - メンバーの動機付け
第5回 12月10日（木） 5限（17:10～18:50）	- リーダーシップ項目の理解～④主体性を高める - 主体的な人になるために必要なこと - リーダーシップを発揮するためにソーシャルスタイルの理解

2. 2020年度リーダーシップ養成プログラムの概要

この「リーダーシップ養成プログラム」は、3つの内容で構成されている。

①リーダーシップの学習（知識・スキルの理解）

1つは、リーダーシップの考え方やリーダーシップを発揮するために必要な知識・スキルの理解である。ここでは、オリジナルの映像教材やケース教材を用いた演習を実施し、リーダーシップの考え方やリーダーシップを発揮するために必要な知識・スキルを学習する。

2020年度は、リーダーシップを発揮するうえで必要な項目の中から、特に①論理的な指示の出し方、②効果的なファシリテーションの方法、③メンバーの動機づけ、④リーダーに求められる主体性⑤ソーシャルスタイルを取りあげ、新たに制作した映像教材などを用いながら様々な演習を実施した。

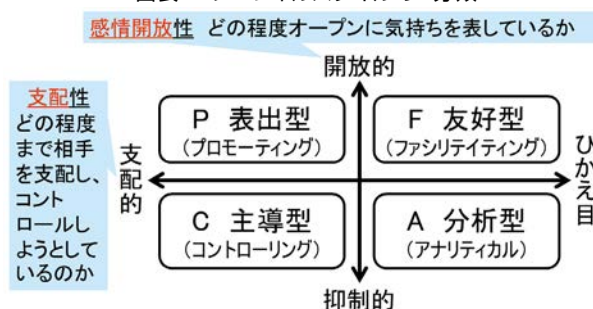
オンライン研修となったことで、演習がうまく実施できるかが懸念されたが、受講者たちはオンライン上でもそれぞれしっ

かり意見を述べ合い、むしろ対面研修時よりも集中して取り組んでいたように思われる。これは、2020年度前学期に大学の授業が全てオンラインになったことで、受講者たちがすでにオンライン授業の受講方法に慣れていたことも大きく影響しているものと考えられる。

また2020年度は、新たにリーダーシップを発揮するうえで効果的な「ソーシャルスタイル」の考え方を講義し、産業能率大学の社会人教育部門が企業研修用に提供している「ソーシャルスタイル診断」を導入し、受講者個々のソーシャルスタイルの診断を行った。

ソーシャルスタイルとは、産業心理学者のデビット・メルリとロジャー・リードが1960年代初頭に概念化したもので、対人関係場面での個人の行動を①P：表出型②C：主導型③F：友好型④A：分析型の4つに類別したものである。人はみな対人関係場面における安定的な行動傾向として、主要なソーシャルスタイルを持っており、それぞれのスタイルに優劣はない。また、人は、自己と他者のソーシャルスタイルを正しく理解することで、信頼関係を構築し、効果的なコミュニケーションを行うことができる。とされる。

図表2：ソーシャルスタイルの4分類



リーダーシップとは「目標達成」に向けて、リーダーが他者やチームに与える「影響力」であり、リーダーシップが発揮されるには、リーダーの影響力をフォロワーが「前向き」に受け入れることが前提となる。その意味で、メンバーにリーダーの影響力が効果的に発揮されるには、リーダーが各メンバーのソーシャルスタイルを理解し、各ソーシャルスタイルにあった働きかけを行うことが求められる。今回の研修ではこうしたソーシャルスタイルの考え方や他者への影響の与え方について学習する時間を設けた。

産業能率大学の社会人教育部門にはこうした自己理解のための診断ツールが多数開発されており、今後もリーダーシップに関連するツールを効果的に活用した研修を企画したい。

②リーダーシップの実践 (チーム活動でのリーダーシップの発揮)

2つ目のプログラム内容は「リーダーシップの実践」である。例年の研修では、リーダーシップを実践する機会として、「レゴの高積み」や「創作サンドイッチ演習」など、研修中にチームで課題解決に取り組む演習を複数回実施しているが、2020年度はオンライン研修となったため、楽しみながら取り組めるこうしたアクティビティが実施できなかった。

そこで2020年度は、各運動部の中で問題になっている事象を1つとりあげ、その解決策を考え、実行する「小集団活動」に重点的に取り組んでもらい、その活動を、リーダーシップを実践する機会とした。

各運動部とも対面でのミーティングが制約される状況ではあったが、この小集団活動において受講者たちはオンライン会議ツールを用いながら研修外の時間も活用し、解決策をまとめあげた。以下はサッカー部がまとめた問題とその解決策である。

図表3：受講者が取り挙げたサッカー部の問題と解決策

【1】取り上げるクラブの問題 ● カテゴリー別のオンザピッチとオフザピッチの行動での温度差
【2】解決策(問題解決のための具体的なアイデア) ● 他のカテゴリーとの紅白戦を増やし、上のカテゴリーと関わる機会を増やすことで高いレベルの雰囲気や基準を感じさせる。
【3】実行体制(誰が、いつから、どのような体制で実行するか) ● 僕たちがキャプテンに伝え、キャプテンからスタッフの方に来年から実行したいと伝えてもらう。
【4】解決策を実行することで目指す目標 ● チームの底上げやチーム基準を選手に再確認してもらう ● カテゴリーごとに様々な理由で緊張感や自覚が生まれるため、チーム全体が締まる

このような形で、受講者は運動部ごとに、実際に部が直面している問題事象を取り上げ、その原因を探索し、問題解決のための課題や施策を検討した。

この取り組みも、オンライン上でどこまで実施できるかが懸念されたが、受講者たちは積極的にミーティングを行い、実行可能な具体的なプランをまとめ上げることができた。

また、上記施策の実行状況については、本学の学習支援システムであるmanaba上に毎月実施報告をあげてもらうことで、筆者はその実行状況をチェックした。各運動部の問題解決の活動過程をオンライン上で確認し、適宜介入ができるようになったのも研修のオンライン化によって得られた効果であった。

③リーダーシップの内省 (自身のリーダーシップの振り返りと気づきの言語化)

3つ目のプログラム内容は「リーダーシップの内省」である。各回の研修での演習や上記の問題解決活動の後、自身のリーダーシップを振り返り、気づいたことや今後の課題を自分の言葉で書かせるというものである。今回は研修後毎回、学習支援

システムmanabaに振り返りの記述をアップしてもらった。以下は、そうした振り返りの記述の一例である。

図表4：受講者の振り返りの記述例

今回の授業でもファシリテーション演習を行いました。今回は前半自分が初めて、ファシリテーターを務めました。ファシリテーターとして大切な、目的の確認から入り、目的に合致する基準の設定をグループの人から考えを出してもらえようと思いました。

またグループの人のアイデアに対して、一歩引いた立場から違う観点からのアプローチも行い、無駄な時間がなく、10分間内容の濃い話し合いをすることができました。またその後の話し合いの報告では、ロジカルに話すことを意識して発表しました。

まだまだ完璧とは言えない状況ですが、このリーダーシップの授業を通して、学んだことを最後の授業で発揮することができたと感じています。

リーダーシップを発揮する際に必要となるマインドというものを知りました。その中で自分は特に主体性を大切にリーダーシップを発揮したいと考えています。

主体性とは最後の授業でも学んだように、自分の意志、判断によって自ら責任をもって行動する態度や性質のことです。これらの力を身に付けるために口頭から主体的な言葉を発信することを意識したいと思っています。自信がないことでも「～します」と言い換えることによって自然と自覚や責任が生まれてくると思います。

産能サッカー部が関東リーグ1部リーグに昇格し、もっともっと価値をあげるためにリーダーシップの授業で学んだことを十分に発揮していきたいと思っています。

前回の宿題の問題解決の解決策では、「心掛ける」などの抽象的なものではなく、ルール化などをして他の部員にやらせた方がよいということがわかりました。自分の部活はルールなどをあまり決めないような部活ですが、このようなあたり前前のことをできないということはルール化する必要があり、習慣化させる必要があるということがわかりました。

今回のグループワークでファシリテーション役を行いました。問題の定義を決めずに話し合いを進めてしまったため会議が思うように進まなかったことが反省点です。

今までファシリテーション役のようなことをやったことがほとんどなかったので今回の定義を決めてから話し合いをするというのはこのプログラム以外の授業や、他に会議などをするような機会があれば使える技術だと思いました。

今後の部活動では、まずはルール化した方がよいもの話し合ったり、他に部活での問題点を話し合い、解決策を導き出せたら良いなと思いました。ただルールを決めるのではなく、部員全員が納得できるようなルールを話し合い決めていきたいと思っています。

また、部活でもミーティングをする機会があるため、そのようなときは、問題の定義を考えてからみんなで話し合いを進めていきたいと思っています。

このように、受講者は毎回の研修で行った演習や活動プロセスを振り返り、リーダーシップを発揮するうえでの気づきを言語化している。こうした振り返りの記述は、自身やチームの課題を客観的に把握・分析する力を養うことを目的としており、受講者の記述内容からはこの研修への参画を通して、リーダーシップの発揮に関する様々な気づきが得られていることが確認される。

3.リーダーシッププログラムの今後の課題

前述のとおり、2020年度は残念ながら新型コロナウイルス感染症の拡大で、対面での研修が実施できなくなり、全会合をオンラインで実施することになった。

しかし、本稿で述べてきたように、結果としてオンラインでの実施によって大きな問題は起こらず、むしろ、受講者は対面時よりも積極的に発言し、集中して研修に臨んでいた。また学習支援システムを活用することで、各運動部の小集団活動の進捗管理や介入、演習の振り返りも容易になるなど、オンライン化に伴うメリットもあった。

2021年度も感染症の影響から、オンラインを前提とした研修実施が予想される。その際、2020年度は実施できなかった、チームで取り組むアクティビティをどのように再設計するかが課題である。この1年で様々なオンライン教育方法が世の中で紹介されるようになっており、そうした知見も参考にしながら、個々がリーダーシップを発揮しながらチームで課題解決を行う演習をオンライン上で実施するために、どのようなやり方があるか検討を進めたい。

筆者は2008年の北京大会以降、夏季・冬季合わせて計6回、オリンピックの開催のたびに大規模世論調査を実施してきた。本来であれば2020年も同様の調査を実施する予定であった。しかし、コロナ禍により2020東京五輪は史上初の1年延期となり、当該調査も実施が叶わなかった。しかしその前代未聞の状況下だからこそ、調査によって捉え残世に残なければならない世相がある。本稿においてその一部を紹介する。

調査概要

2020年度は前期と後期にそれぞれ大規模な調査を実施した。前者は7月末に実施し10月20日に「コロナ禍のスポーツ観戦意識調査」の名でプレスリリースを行った (https://www.sanno.ac.jp/news/pressrelease/press20201020_01.html)。この調査結果の一部を取り上げた共同通信社の「東京五輪 来年も難しい 85%」はYahoo!のトップニュースとなり、多くのテレビ番組でも取り上げられた。さらに11月8日に開かれた体操国際競技会の閉会式では、内村航平選手がその数値を引用し「五輪ができないんじゃないかというのが、80%を超えていて残念。できないじゃなくて、どうやってできるかを皆さんで考えて」と訴え大きな反響を呼んだ。

このように前者に関しては周知の点も多いため、本稿では後者すなわち2020年度後半に実施した表1のWebリサーチ結果について、そのサマリーを述べる。予備調査・本調査とも全国調査だが、予備調査(N=10,000)は「世論調査」に近似したフレームワークで実施した広範調査である一方、本調査(N=1,000)は東京五輪肯定者に限定した「追跡調査」である点に留意の上、読み進められたい。

表1. 2020年度後期実施の大規模Webリサーチ概要

調査区分	N	調査期間	サンプリング
予備調査	10,000	2021/1/28~2/2 (6日間)	総務省最新人口統計比率に準拠 (20歳~69歳、性・世代・都道府県割付)
本調査	1,000	2021/2/12~2/15 (4日間)	予備調査の回答をもとに2021年の 「東京五輪開催肯定者」に限定

アンビバレントな世論

予備調査の結果明らかになったのは、1年延期され2021年に開催予定の東京五輪について、その是非をめぐって、そのどちらにも割り切れない世論の現実であった。両者を象徴する調査結果を表2・表3にまとめたが、両者を対照すると、表2において「コロナ終息まで五輪見合わせを」が64.6%に上るのに対し、正反対の表3「開催されたら注目して視聴する」も62.2%に上り、矛盾して見える。だがこの結果にこそ、中止・開催の二元論で簡単に割り切れない国民感情が表れていると解釈できよう。表2からは、仮に開催する場合も「無観客」が大前提であり、外国人の入国制限を維持したまま「国内在住者限定」という意見が多数派であることが見て取れる。平時であれば「スタジアムで生観戦したい」人たちが大多数に上るはずが、その希望者はわずか26.2%に留まっている。

しかしながら、実際には五輪開催を期待する意見も少なくないことを示すのが表3だ。もし開催されたら「注目して視聴する」との回答者は6割以上にものぼる。また、延期もなく「完全に中心になったら喪失感が大きい」の回答者も4割以上あり、努力を重

ねるアスリートのために2021年に開催を願う声は約半数に及んでいた。

表2. 東京五輪開催を疑問視する調査結果

変数ラベル	該当率	実際の質問文
公平性が保てない懸念がある	70.0%	選考会を行えない競技や練習不足の選手もいて、公平性を保てない大会になると思う
開催するなら無観客しかない	69.2%	国内外の感染状況が収まらない中で開催するのなら、無観客開催しかないと思う
有観客なら国内在住者限定で	66.2%	有観客で行うならば、入国制限は維持し、観客は国内在住者に限定してほしい
コロナ終息まで五輪見合わせを	64.6%	全世界でコロナが終息するまで、冬季も含めて五輪の開催は見合わせるべきだ
スタジアムで生観戦したい	26.2%	折角の自国開催だから、チケットが手に入るなら現地で観戦したい

表3. 東京五輪開催への潜在的期待を示す調査結果

変数ラベル	該当率	実際の質問文
開催されたら注目して視聴する	62.2%	問題は山積みだが、実際に開催されたら、競技中継を注目して視聴すると思う
新しい競技観戦スタイルに期待	61.4%	コロナ禍だからこそ、オンラインやVRなど、新しい観戦スタイルに期待したい
安心安全に開催できたら大成功	61.2%	経済効果が得られなくても、安心・安全に開催できたら大成功だと思う
アスリートのため今年に開催を	49.7%	努力を続けるアスリートのことを考えると、なんとか今年に開催してあげたい
完全中止は喪失感が大きい	41.9%	東京五輪が再延期されることもなく、完全に中止になったら、喪失感が大きい

多様化する世論

予備調査は全国1万人を対象にしていることから、性別・世代はもちろん、都道府県間の比較も安定的に検証可能である。属性間に大きな違いが見られた質問の具体例を以下に取り上げたい。

はじめに性別間に大きな違いが見られた質問についてである。表4は性差が10ポイント以上あった2問であるが、女性の方が感染リスクへの警戒感が強く、ワクチンについても安全性を気にするなど、自身の身体について男性よりも敏感な意識を持っていることが示されている。

つぎに世代間格差だ。図1ではあえて世代間格差がほぼ見られない質問と比較している。「コロナ禍でも運動すべき」（実際の質問：健康のため、コロナ禍であっても対策を行い、スポーツをした方がよい）のように性差・世代差がほとんどない一般的価値観がある一方で、新型コロナウイルス感染症の重症化リスクへの認識（同：自分はたとえコロナに感染しても、重症化のリスクは低いと思う）には大きな隔たりがあり、世代差を考慮しない一律の政策での限界を提示している。

さいごの都道府県格差でわかりやすいのは、図2・図3になる。この質問は表2・表3で既出の質問の該当率を都道府県別に図示したものである。特に「東京都」に着目すると、開催会場に近

いため「スタジアムで生観戦したい」は47都道府県で最大の数値(37.2%)を示す反面、多大な都民の血税も投じられていることから「安心安全に開催できたら大成功」は最低の数値(56.3%)を示すなど、受益者負担が満たされないことへの不満も垣間見える。

表4. 性差の大きかった調査結果

変数ラベル	実際の質問文	男性	女性
練習中もマスクすべき	スポーツの練習中も、感染防止の観点からマスクを着用すべきだと思う	51.2%	62.2%
ワクチン様子見たい	新型コロナウイルスのワクチンは安全性が心配で、すぐに接種したいとは思わない	53.6%	65.4%

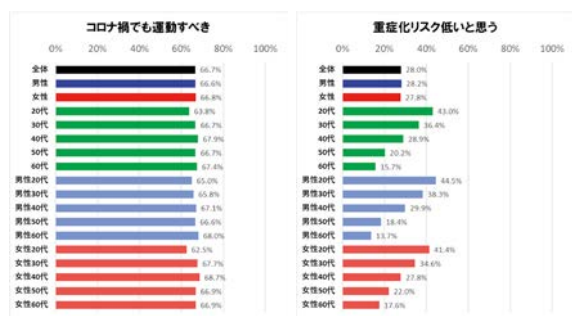


図1. 有意な世代差が見られない質問と顕著な質問

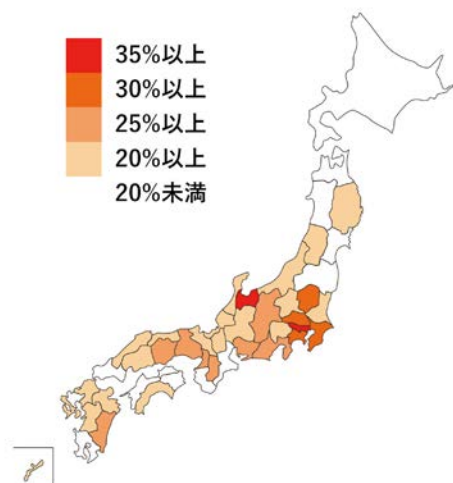


図2. 「スタジアムで生観戦したい」の都道府県別該当率

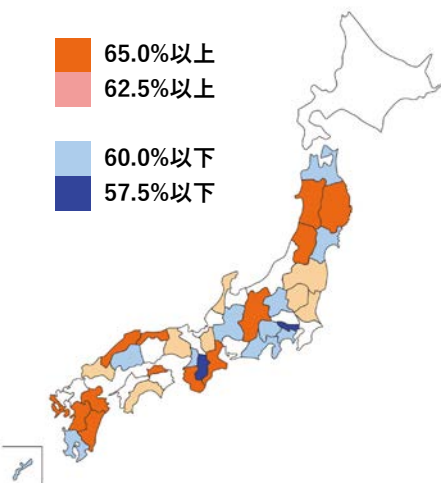


図3. 「安全安心に開催できたら大成功」の同該当率

ポスト東京五輪へのレガシー

最後に本調査のデータをもとに、東京五輪の功罪について考察したい。図4に示す通り、2013年の招致成功以来の「景気浮揚効果」(実際の質問:開催地決定からコロナ前まで、景気浮揚に一定の効果があった)については、五輪開催肯定派の約7割が認めるところだ。だが、逆行する「商業主義の見直しを」(同:コロナ禍を機に、商業主義的な五輪は見直されるべきだ)も6割強が肯定している。この結果は、各回答者が「経済効果」に多大な期待を抱いていたことの自省であるとともに、延期の過程の中で次々と明るみになった現代五輪の過剰なコマーシャリズム体質への批判であろう。

そもそも誘致時のコンセプトは「復興五輪」だったはずだ。それに関連する質問「復興五輪の役割果たした」(同:東日本大震災からの「復興五輪」の役割を果たしてきた)に注目すると、原発事故により最も甚大な被災地ともいえる「福島県」が最低ランクの数値(27.3%)を示していることがわかる(図5)。本調査は五輪肯定派に限った調査であることから、実際はもっと低い数値に留まることは想像に難くない。

以上の省察材料に富む調査結果を踏まえると、仮に東京五輪が盛大に開催され、金メダルラッシュに沸いたとしても、我々は負の遺産である教訓面を軽んじることなく肝に銘じなくてはならない。筆者は2021年夏の東京五輪開催前後にも大規模調査を予定している。これまでの五輪とは一線を画する2020東京五輪をテーマに、五輪そしてスポーツの持続的発展に資する建設的批判を残したいとの決意を新たにしているところである。

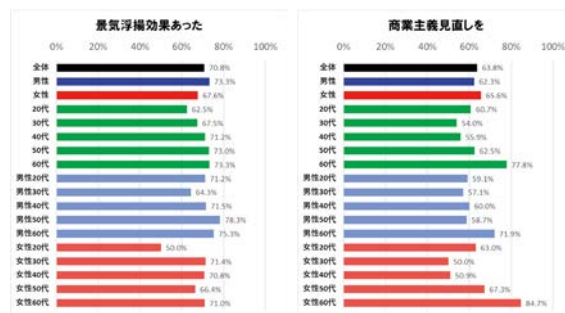


図4. 「景気浮揚効果」と「商業五輪見直し」の該当率

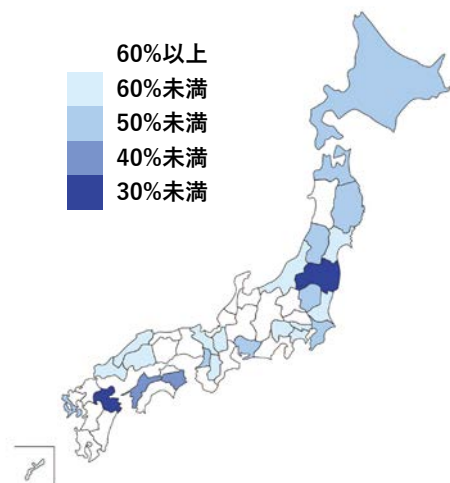


図5. 「復興五輪の役割果たした」の都道府県別該当率

「スポーツ・プロモーション」とは、本学と横浜 DeNA ベイスターズとのコラボレーション授業であり、「産業能率大学スペシャルゲーム」としてプロ野球イースタンリーグ公式戦 1 試合を学生自らの手でマネジメントするものである。2020 年のスポーツ・プロモーションでは、心理検査を用いたコンテンツをプロデュースすることとなった。その機会を通じて、ファン心理の分析を行うと共に、コミュニケーション能力の向上や人間理解の深化を目的とし、学生によるオンライン形式によるストレス検査とフィードバックカウンセリングを実践した。本稿では、その取り組みと結果を報告する。

1. 経緯と背景

2020年8月7日に横須賀スタジアムで開催された「産業能率大学スペシャルゲーム2020（横浜DeNAベイスターズ vs 読売ジャイアンツ：イースタン・リーグ公式戦）」は、コロナ禍の中での開催となり、観戦者限定600人で開催された。

2020年のスペシャルゲームは「びかびかYOKOSUKA大作戦」というテーマが学生から掲げられた。「びかびか」には新型コロナウイルスに苦しむ世の中にとってプロ野球が希望の光となしてほしいという想いと、感染リスクを減らすための安全なイベントで来場者に光を届けたいという想いが込められ、それにちなんで多くのイベントが開催された。

そのメインテーマに則し、本研究におけるコンテンツは「びかびかメンタルZOOMイン」と題して開催された。具体的な取り組みとしては、球場外に設置されたテントに複数台のノート型パソコンを用意し、そこからZOOMを活用したオンラインストレス検査およびそのフィードバックカウンセリングとストレスコンサルティングを行った（図1～3参照）。尚、ストレス検査およびそのフィードバックカウンセリングを行う学生（20名）は湘南キャンパスの教室にスタンバイし、教室からオンラインでストレス検査とフィードバックカウンセリングを行った（図4参照）。



図 2. 案内誘導②



図 1. 案内誘導①



図 3. 実施風景①



図 4. 実施風景②

2. ストレス検査 –J-SACL–

本研究におけるストレス検査には「J-SACL (Japanese-Stress Arousal Check List)」を使用した。J-SACLは英国のCox と Mackey によって作成されたSACL (Stress Arousal Check List) に準拠して作成された日本語版の呼称である。J-SACLは人間のストレス反応を「情動の変化」「行動の変化」「身体症状の出現」と大きく3つに分類し、ストレスによって生じる人間の変化の中で最も早い時期に生じるのが情動の変化であるとした上で、ストレス状況が行動上の変化や身体症状を生じさせる前にそのシグナルとして情動変化をとらえようと作成されたものである。また、J-SACLは、SACLの単なる翻訳ではなく、SACLと同じ発想のもとに、日本人の心理・社会的環境を反映できるように作成されたものである。

具体的には、30の情動表現が今の自分にどの程度当てはまるかを選択回答し、その合計点から「ストレスの負荷度 (ST)」と「ポジティブな覚度 (AR)」を算出し、それぞれの高低で4つのタイプに分類するというものである。

3. 結果

本研究に参加してくれた方は21名（女性7名、男性14名）であり、平均年齢は27.24歳であった。図5はAR/STのバランスの分布図であり、図6はポジティブ情動表現の各項目の平均値、図7はネガティブ情動表現の各項目の平均値である。

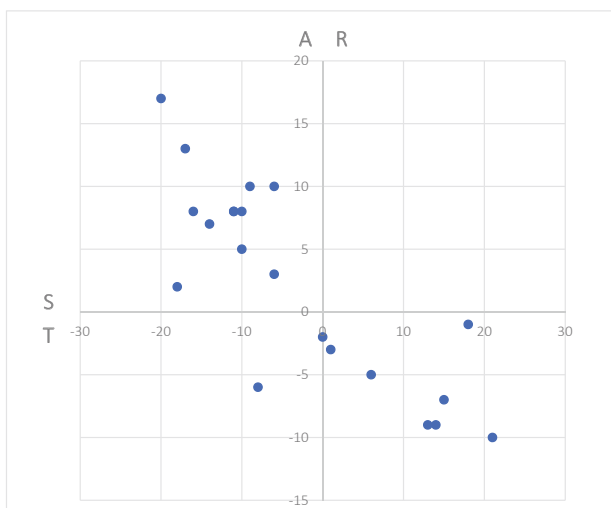


図 5. AR/ST の分布図

4. 考察

紙面の都合上簡潔に傾向をまとめると、まず分布図（図5）から①AR高／ST低、②AR低／ST高、③AR低／ST低、の順に人数が高く、AR低／ST高の群には誰もいないことが窺われる。すなわち、ストレスの負担が低くて活気（ポジティブな覚度）が高いという最も心の健康度が高い人が1番多かったことが示されており、次いでストレスの負担が高くて活気が低い最も心の健康度が低い人が2番目に多かったことが示唆されている。つまり、情緒的な心の健康度が高い人と低い人にとって、本コンテンツは興味関心が高かったことが推察される。ポジティブな情動表現の傾向（図6）からは、「元気」「わくわく」「幸福」といった情緒的な感覚を強く感じている人たちが多いことが見受けられる。これは主に試合開始前の券売利からご利用される人が多くいたので、試合観戦に対するわくわく感や幸福感が反映されていたことも可能性として推察される。ネガティブな情動表現の傾向（図7）からは、「怠惰」「だるい」「憂うつ」といった情緒的な感覚を強く感じている人たちが多いことが見受けられる。これは日常のストレスが反映されていたのではないかと推察される。

5. まとめ

本稿では学生によるオンライン形式のストレス検査とフィードバックカウンセリングを実践した。結果および考察に示されたとおり、本コンテンツに興味関心を示していただいた方は心の健康度が高い人と低い人の対極的な2つの層の利用が多かった。それゆえに精神的健康を維持すべく野球観戦に来ている、もしくは精神的健康を回復すべく野球観戦に来ているという可能性も推察された。また「元気」「わくわく」「幸福」といった情緒的な感覚を抱えている人の多から、野球観戦が精神的健康に寄与する効果が期待できることも示唆された。スポーツ観戦がメンタルヘルスに肯定的な影響を及ぼす可能性が示され、一層精緻なその影響力の明確化が期待される。

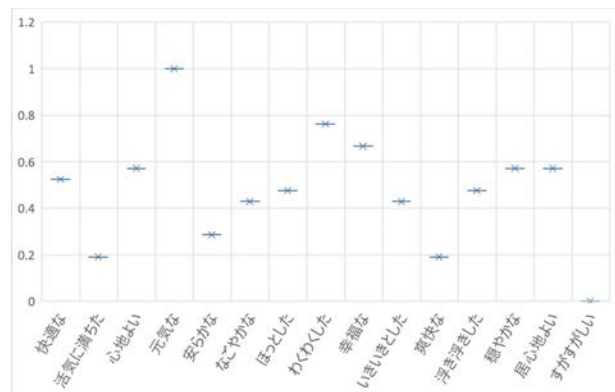


図 6. ポジティブ情動表現の平均値

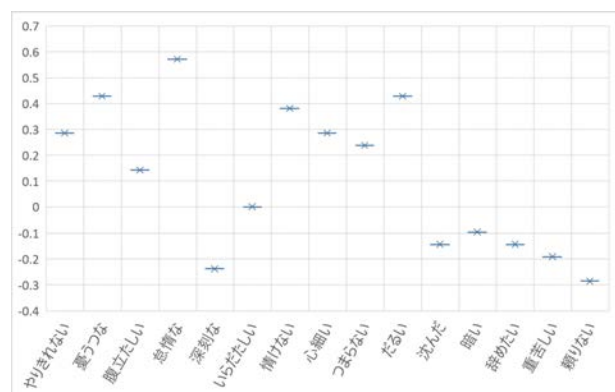


図 7. ネガティブ情動表現の平均値

ウィズ・コロナ時代のインバウンドスキーヤー獲得に向けて ～新潟県湯沢町での研修実績を踏まえた考察～

スポーツマネジメント研究所

研究員 駒澤 恵一 高瀬 裕也 中川 直樹

客員研究員 行方 剛

1. はじめに

2020年は世界的に新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナウイルス）一色の1年となった。本学においても、2020年度に予定されていた海外に渡航する科目はすべて閉講となった。また、当研究所が主催して行っている、姉妹校の台湾「銘傳大学」との交流事業である「スキー・日本文化体験研修」も、3年目を迎える2021年2月は実施することができなかった。

未だ新型コロナ終息の目途は立っておらず世界中で人の移動が制限されているが、終息を迎えた時に、人は「どのような旅行を求めるのか」、「旅行にどのような変化が生まれるのか」を考えてみたい。

2. 訪日外国人と出国日本人数の推移

訪日外国人数は2011年から9年連続で増加していたが、2020年に前年比約87%減となった。2016年に開催された「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」では、当初東京オリンピック・パラリンピックが開催される予定であった2020年に4,000万人を目標値として設定されていたが、新型コロナの影響で達成とはならなかった。

3. 訪日外国人の意識変化

2020年6月に日本政策投資銀行と公益財団法人日本交通公社が共同で訪日外国人向けに実施したアンケートを紹介したい。

■海外旅行にける予算と期間

アジア居住者、欧米豪居住者ともに、新型コロナ終息後は海外旅行にける予算を上げる傾向にある。また滞在日数も長くなる可能性を示唆している。長らく海外旅行に行けなかった反動で、予算額を上げて長期的な滞在を期待していることが分かる。

同アンケートでは「海外旅行にける予算と期間」に加えて

「訪日旅行に期待すること」も調査している。結果では、「衛生面における配慮、清潔さ、消毒などのウイルス対策全般の継続」がトップとなっており、「清潔さ」や「ウイルスとの距離」を求める訪日外国人の声が高く、新型コロナ終息後も感染症に対する安心を提供する仕組みが重要であることも分かった。

4. これからの新潟県湯沢町のスキー産業に必要なこととは

本学は授業や研究活動、学生の同好会などで新潟県にある湯沢町（以下、湯沢町）との関わりが深い。そこで、湯沢町のスキー産業について、先のアンケート結果をもとに課題の検討と僭越ながら提言を行いたい。

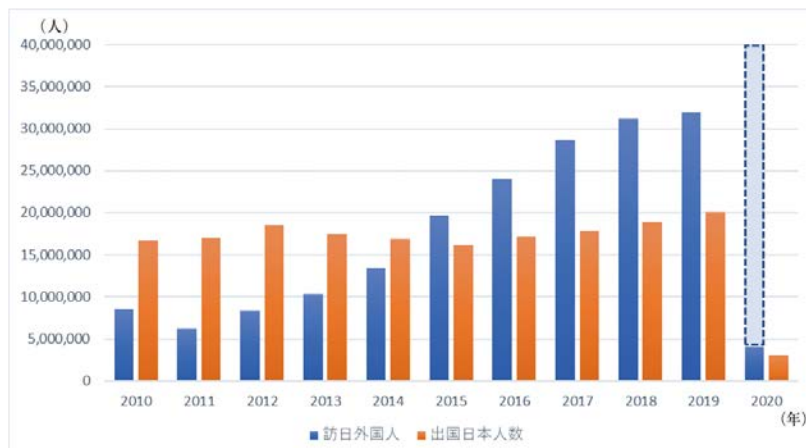
■湯沢町の課題と提言

湯沢町は、町民の約4割が観光産業に携わっており、スキーは町の一大産業である。

しかし、北海道などに代表される大規模スキーリゾート地と比べたときに、その規模や知名度で劣ってしまうため、小規模だからこそ「何でも1か所揃う」ことで勝負する必要がある。

「子供が小さい」「お年寄りがいる」という理由で、家族旅行の選択肢からスキーは除外されがちであるが、湯沢町は1人でも、3世代家族でも、各世代が満足できる楽しみ方の選択肢（※）があることと、それらが全て湯沢町内で実施・体験できる（完結できる）ことをアピールすることで需要を創出できる可能性がある。

（※）スキー、スノーボード、ソリ、雪遊び（雪だるま、雪合戦、スノーパーク）、かんじき体験、食事（ご当地グルメ）、温泉（湯めぐり）、お土産（特産品）、宿での日本文化体験など。



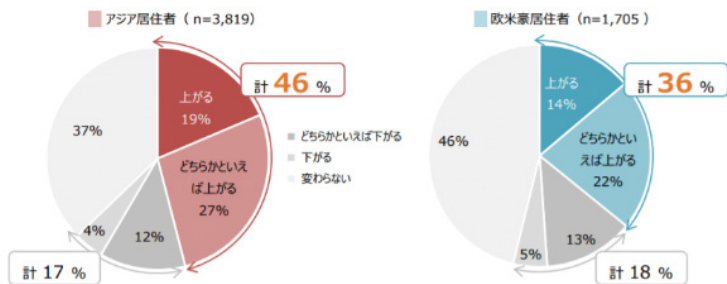
出典：日本政府観光局の統計データをもとに当研究所にて作成

食事に関しては、実現へのハードルがあると認識しているが、地元の名物をテイクアウトして、短時間で飲食できるスペースを駅周辺に整備できると、これからのウィズ・コロナ時代のニーズに合致したサービス提供となるだろう。

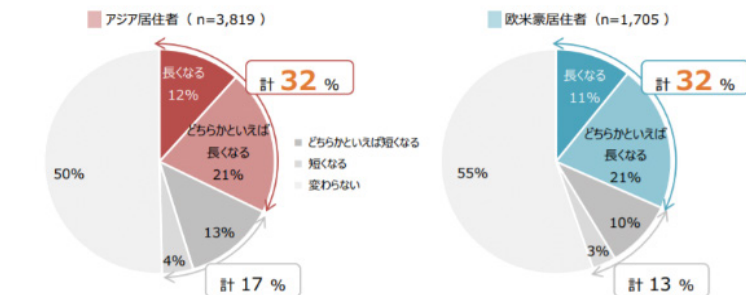
■スキー場の課題と提言

多くのスキー場では、スキーヤーのための飲食・待機施設はあってもスキーをしない人・初めてスキーを体験する人が利用しやすい施設

海外観光旅行希望者 新型コロナの終息後、海外観光旅行の予算はどのように変化するか（回答はひとつ）



海外観光旅行希望者 新型コロナの終息後、海外観光旅行の滞在日数はどのように変化すると思うか（回答はひとつ）



出典：DBJ・JTBF アジア・欧米系 訪日外国人旅行者の意向調査（2020年度 新型コロナ影響度 特別調査）
（アンケートはインターネットを用いて行われた。韓国、中国、台湾、香港、タイ、シンガポール、マレーシア、インドネシア、アメリカ、オーストラリア、イギリス、フランスの12地域を対象地域として、20歳～59歳の男女、かつ海外旅行経験者から6,266人の有効回答を得ている。）

やサービスが少ない。誰でもゲレンデを楽しめるような空間・サービス・雪に親しめるアクティビティの提供が必要ではないだろうか。

例えば「スキーはやってみたいけれど、初めてで分からないし、レッスンを受けるのはハードルが高い」と思っている人がいるとしたら、その人に対して少しの時間でもスキーレッスンを無料で提供すれば、スキーに興味を持つかも知れない。それにより次は家族で訪れ、ファミリー全員がスキーをするきっかけになるのではないだろうか。

湯沢町には11ものスキー場があり、それぞれのスキー場に特徴があるが、その違いはあまりよく知られていない。各スキー場の特色をもっと前面に打ち出して、利用者が比較・検討しやすい情報発信が求められている。ゲレンデだけでなく、付属施設、サービス、アクティビティ、レストランのメニューなどで各々のスキー場がオンリーワンの価値を創っていく必要がある。旅行者が自分に合ったスキー場を見つけることを、湯沢町の楽しみ方の1つにしてもらえるようにできたら素晴らしいと思う。

また、「衛生面」にも気を配りたい。日本は世界的に見ても衛生的だと言われているが、定期的な除菌や清掃がされていることや、旅行中はソーシャルディスタンスが確保できることをアピールすることで、感染症に対する「安心」を売りにできる。湯沢町のアピールポイントとして「衛生管理」を打ち出すことは、これからの旅行者にとっては魅力的に映るだろう。

■インバウンドスキーヤーの獲得に向けて

湯沢町では台湾、香港、中国などの中華圏の来訪者が全外国人の7割を超えるという統計がある。そのため英語の表記のみ

ならず中国語の案内やコース上の掲示を充実させることは、中華圏のインバウンド需要の喚起に大きな効果がある。

また、台湾など、地域によっては雪を見ること自体が珍しく、スキーだけではなく雄大な雪山を背景に写真撮影をしたい（SNSに投稿したい）というニーズもある。ゲレンデにフォトスポットを設置することや、スタッフによる写真撮影のサービスがあると満足度を高めることになるだろう。

これまで当研究所が実施した台湾「銘傳大学」との「スキー・日本文化体験研修」では、スキーレッスンをビデオ撮影し、宿舎で視聴するという取り組みを行ったところ大変好評であった。撮影した映像をデータなどで渡すことができるとトレーニングのツールにもなり、良い思い出にもなる。そうすれば結果的に研修の満足度が高まり、湯沢町やスキーの評判が周囲にも口コミとして広がっていくだろう。スキー場の取り組みとしても、そのような一期一会のサービスを導入することを検討すると良い。

前述のアンケート結果から、将来的に訪日客の旅行予算が上昇することと、滞在期間が長くなることが予想される。長く滞在しても飽きない施設・サービスを提供することができれば、インバウンド客の期待に応えることができ、その評判を周囲に広げることで集客を増やす、正のスパイラルが期待できる。

新型コロナの世界的な感染拡大が落ち着いた後も、「スキー研修のリモート開催」「オンラインスキーツアー」も湯沢町観光の1つの選択肢としてあると良い。

例えばウェアラブルカメラで撮影したスキー動画を配信して、滑降するスピード、ゲレンデの傾斜、リフトの乗り降りなどを体験してもらえると、湯沢町やスキーをもっと身近に感じてもらえることができる。オンラインツアー参加者には「リフト券」や「レンタル割引券」を付与すれば、将来の顧客確保につながることができ、湯沢町の活性化につながるはずだ。

5. おわりに

ここまでの考察を踏まえて、新型コロナの感染拡大がある程度の落ち着きを見せ、世界の人々が動き出せるようになったとすののために、今からインバウンド向けの訪日スキー研修プログラムの検討を進めておく必要がある。

当研究所が行っている、外国人向けのスキーレッスンの最大の課題はやはり「言語」「（食）文化の違い」である。ジェスチャーだけではなく、滑るときに身体の使い方などのポイントを言葉や教材で伝えたいときに、どのような単語なら相手に伝わるのか。挫けそうなスキー初心者の受講者に対して、どのような言葉で声掛けをしたら効果的なのか。どのような「おもてなし」が好まれるのか。まだ試行錯誤の段階であるが、引き続き当研究所で研修実績を積み重ね、アウトプットしていきたい。

12

TOPICS 2020

9/5-6 女子ビーチバレー部 第32回全日本ビーチバレーボール大学選手権大会優勝 (山田/オト)、4位 (伊藤/野口)



12/19 サッカー部 関東大学サッカーリーグ2部を12チーム中4位の創部史上最高成績で残留



1/26 サッカー部 オンラインでの入団発表を実施



13

SANNOスポーツマネジメントのあゆみ (2004-2019)

本学は、湘南ベルマーレ、横浜 DeNA ベイスターズ、横浜ビー・コルセアーズと提携関係を結び、情報マネジメント学部の授業科目の共同開発や研究活動を行ない、大学の行事や活動への協力など、数々の取り組みを展開してきました。本学のスポーツマネジメントの今日までの取り組みについて紹介します。

2004年

- 4月 「スポーツビジネス実践講座」開講
- 6月23日 湘南ベルマーレ SANNOサンクスデー開催

2005年

- 7月13日 湘南ベルマーレ SANNOサンクスデー開催

2006年

- 4月 スポーツマネジメント科目2科目を開講
- 6月21日 湘南ベルマーレ SANNOスペシャルデー開催
- 10月 サッカー強化・人材育成プロジェクト開始
- 10月 湘南キャンパス第1・第2グラウンド改修

2007年

- 1月 横浜ベイスターズと提携
- 2月1日 サッカー部監督に坂下博之氏が就任
- 4月 情報マネジメント学部にスポーツマネジメントコースを開設
- 4月 横浜ベイスターズとの共同授業「スポーツ企画プロジェクト」開講
- 6月27日 湘南ベルマーレ SANNOスペシャルデー開催
- 8月14日 湘南シーレックス 産業能率大学 スペシャルゲーム開催
- 10月 スポーツマネジメント研究所設置
- 10月 女子ビーチバレー部発足川合麻氏がヘッドコーチ就任
- 12月16日 湘南キャンパスにビーチバレーコート竣工

2008年

- 1月 湘南ベルマーレ・沖縄キャンプにて選手・コーチ陣を対象とするキャリア支援プログラムを実施
- 4月7日 ビーチバレーコート開設記念式典開催
- 5月 産業能率大学collaboration with 湘南ベルマーレ スポーツ教室スタート
- 6月25日 湘南ベルマーレ SANNOスペシャルデー開催
- 8月30日 湘南シーレックス 産業能率大学 スペシャルゲーム開催
- 11月 サッカー部 関東2部昇格への初挑戦
- 11月20日 東京アパッチ 産業能率大学スペシャルゲーム開催

2009年

- 6月21日 SANNOスペシャルデー開催
- 8月 第21回全国ビーチバレー 大学男女選手権大会で準優勝（溝江選手・大原選手）
- 8月18日 湘南シーレックス 産業能率大学 スペシャルゲーム開催

- 10月18日 神奈川県大学 サッカー秋季リーグ出場

- 11月14日 ビーチバレーフェスタ2009開催

2010年

- 5月 女子ビーチバレー部溝江選手・石田選手平成22年度日本バレーボール協会ビーチバレー強化委員会強化指定選手に選出
- 5月16日 湘南ベルマーレ SANNOサンクスデー開催
- 8月 第22回全国ビーチバレー大学男女選手権大会にて準優勝（大原選手・中村選手）
- 10月16日 ビーチバレーフェスタ2010開催
- 11月 女子ビーチバレー部 溝江選手 第16回アジアオリンピック評議会アジア競技大会出場
- 11月 サッカー部 関東大学サッカー大会出場

2011年

- 5月29日 湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
- 7月 女子ビーチバレー部関東大学ビーチバレー選手権大会で優勝（小林選手・石田選手）
- 8月 女子ビーチバレー部 第26回ユニバーシアード競技大会出場
- 8月 女子ビーチバレー部 FIVB ビーチバレージュニア世界選手権出場（石田選手）
- 9月11日 横浜ベイスターズ SANNOスペシャルゲーム2011開催
- 10月15日 ビーチバレーフェスタ2011開催
- 11月 サッカー部 関東大学サッカー大会出場
- 12月18日 ビーチバレーSANNOオープン2011開催

2012年

- 6月9日 湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
- 8月12日 女子ビーチバレー部 全国ビーチバレー大学男女選手権大会で初優勝（中村選手・石田選手）
- 9月29日 第21回よこすかカレーゲーム・産業能率大学スペシャルゲーム開催
- 10月20日 SANNO CUP 2012開催
- 11月 サッカー部 関東大学サッカー大会出場
- 11月30日 女子ビーチバレー部第2回アジア大学ビーチバレー選手権大会（溝江選手・石田選手）

2013年

- 1月26日 横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲーム
- 4月 サッカー部監督に加藤望氏が就任
- 5月25日 湘南ベルマーレ 産業能率大学 スペシャルデー開催
- 8月11日 女子ビーチバレー部 全日本ビーチバレー（清水選手・中丸選手）大学男女選手権大会準優勝
- 8月27日 産業能率大学スペシャルゲーム開催

10月13日	SANNO CUP 2013開催
10月21日	ビーチバレー-SANNOオープン2013開催
11月24日	サッカー部 関東リーグ2部昇格！
2014年	
3月21日	サッカー部 越智選手がU' 19 日本代表候補選手に選出
5月31日	湘南ベルマーレ 産業能率大学 スペシャルデー開催
6月15日	2014FIFAワールドカップ ブラジルパブリックビューイング開催
8月9日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム開催
8月10日	全日本ビーチバレー 大学男女選手権大会優勝（沢選手・足立選手）
9月21日	第3回SANNOオープン開催
10月18日	SANNO CUP 2014 「砂にとびこめ！未来をひらけ！」開催
11月9日	Sports Policy for Japan 2014にて 小野田ゼミが優秀賞受賞
11月15日	サッカー部関東リーグ2部残留決定
2015年	
5月25日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
6月28日	業能率大学スペシャルゲーム2015 (SHONAN COOL FES)
8月9日	ビーチバレーボール・ジャパン・カレッジ2015鈴木・ 石坪ペア 優勝
10月18日	SANNO CUP 2015 「思いを伝えあう」開催
10月25日	湘南ベルマーレ 産業能率大学×自由が丘 スペシャルデー 開催
11月15日	サッカー部神奈川県リーグから再スタートへ
12月5日	第4回ビーチバレーボールSANNOオープン開催
12月25日	横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲーム
2016年	
4月23日	第40回 総理大臣杯 全日本大学サッカー トーナメント 神奈川県予選 優勝
5月21日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー2016 開催
7月13日	第8回世界大学ビーチバレーボール選手権大会 (石坪選手、鈴木選手出場)
7月28日	第27回全日本ビーチバレー女子選手権大会5名出場
8月3日	産業能率大学スペシャルゲーム 2016 (おいでよ！パレスタ☆ガーデン) を開催
10月15日	サッカー部 神奈川県リーグを全勝にて優勝
10月16日	SANNO CUP 2016 「笑顔の花を咲かせよう！」開催
12月4日	湘南国際マラソンのボランティアに 本学学生が約 70 名が参加
12月10日	横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲーム開催 B.LEAGUE
2017年	
4月22日	サッカー部 総理大臣杯 全日本大学サッカートーナメント 神奈川県予選 準優勝
5月27日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデーを開催
5月27日	バレーボール部 28季ぶり関東2部リーグ復帰
6月17日	サッカー部 神奈川県大学 サッカーリーグ・春季リーグ 優勝

7月2日	産業能率大学スペシャルゲーム 「セフェスタ（たなひえすた）」開催
7月8日	女子ビーチ 第24回関東大学 ビーチバレー ボール選手権大会 9連覇
7月10日	女子ビーチ 第24回関東大学 ビーチバレーボール選手権大会 9連覇
8月8日	女子ビーチ 国際バレーボール連盟主催ビーチバレーボール U' 21世界選手権大会 2017 小久保利菜メリーが出場
8月17日	女子ビーチ 第29回全日本ビーチバレー ボール大学男女選手権大会 4連覇
10月14日	サッカー部 秋季リーグ 準優勝
10月29日	SANNO CUP 2017 「その一瞬にすべてをかけろ」開催
12月2日	横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲームを開催
12月3日	湘南国際マラソン大会に本学学生が スポーツボランティアスタッフとして参加
12月16日	サッカー部 浜下 瑛（4年） J2 栃木サッカークラブ 加入決定
12月21日	第36回大山登攀競技大会を開催
2018年	
5月19日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
7月7日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム開催
7月8日	ビーチバレーボール世界大学選手権大会 14位 石坪/柴（21ヶ国32チーム出場）
7月14日	ビーチバレーボールNEXT2018 第1回全日本ビーチバレーボールU23男女 選抜優勝大会 若井/山田ペアが優勝
7月15日	第25回ビーチバレーボール関東大学選手権 大会本学の10連覇を達成
8月7日	第30回全日本ビーチバレーボール 大学選手権大会 若井/山田ペア準優勝
8月16日	第29回全日本ビーチバレー女子選手権大会に 4人の部員が出場
10月20日	SANNO CUP 2018 「やってみなきゃはじまらない」開催
11月3日	横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲーム 開催
11月17日	第51回関東大学サッカー大会 昇格決定戦に勝利
12月11日	関東大学サッカーリーグ2部 昇格祝勝会を実施
12月20日	第37回大山登攀競技大会を開催
2019年	
2月12日	サッカー部2018年度プロ入団会見を実施
6月18日-23日	女子ビーチバレー部 FIVBビーチバレーボールU21世界 選手権大会日本代表出場（オト恵美里/永島サディア）
6月30日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
7月6日-7日	女子ビーチバレー部 第26回関東大学ビーチバレー ボール選手権大会 優勝（奥野/山田）
7月7日	横浜DeNAベイスターズ産業能率大学スペシャルゲーム 2019「SHONAN De SPINNER」開催
7月20日-21日	女子ビーチバレー部 ビーチバレーボールNEXT2019第2回全日本 ビーチバレーボールU-23男女選抜優勝大会 優勝（奥野/山田）
8月6日-8日	女子ビーチバレー部 第31回全日本ビーチバレーボール 大学選手権大会 3位入賞（奥野/山田）
10月26日	SANNO CUP 2019 「仲間を信じて突き進め！」開催
11月17日	横浜ビー・コルセアーズ スペシャルゲーム
11月23日	サッカー部 関東大学サッカーリーグ2部に復帰 12チーム中6位で残留
12月19日	第38回大山登攀競技大会 開催
1月28日	サッカー部 産業能率大学サッカー部 プロ入団発表

SANNO SPORTS MANAGEMENT

Vol.13

SANNO SPORTS MANAGEMENT Vol.13

2021年（令和3年）8月発行

< 編集 / 発行 >

産業能率大学 スポーツマネジメント研究所

〒259-1197 神奈川県伊勢原市上粕屋 1573

TEL:0463(92)2211

©The SANNO Institute of Management. All rights reserved.

SANNO SPORTS MANAGEMENT

SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY, JAPAN

